まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3･3）

Unser HERR lebt
主は生きておられる vol.8 | 定価100円（本体95円）

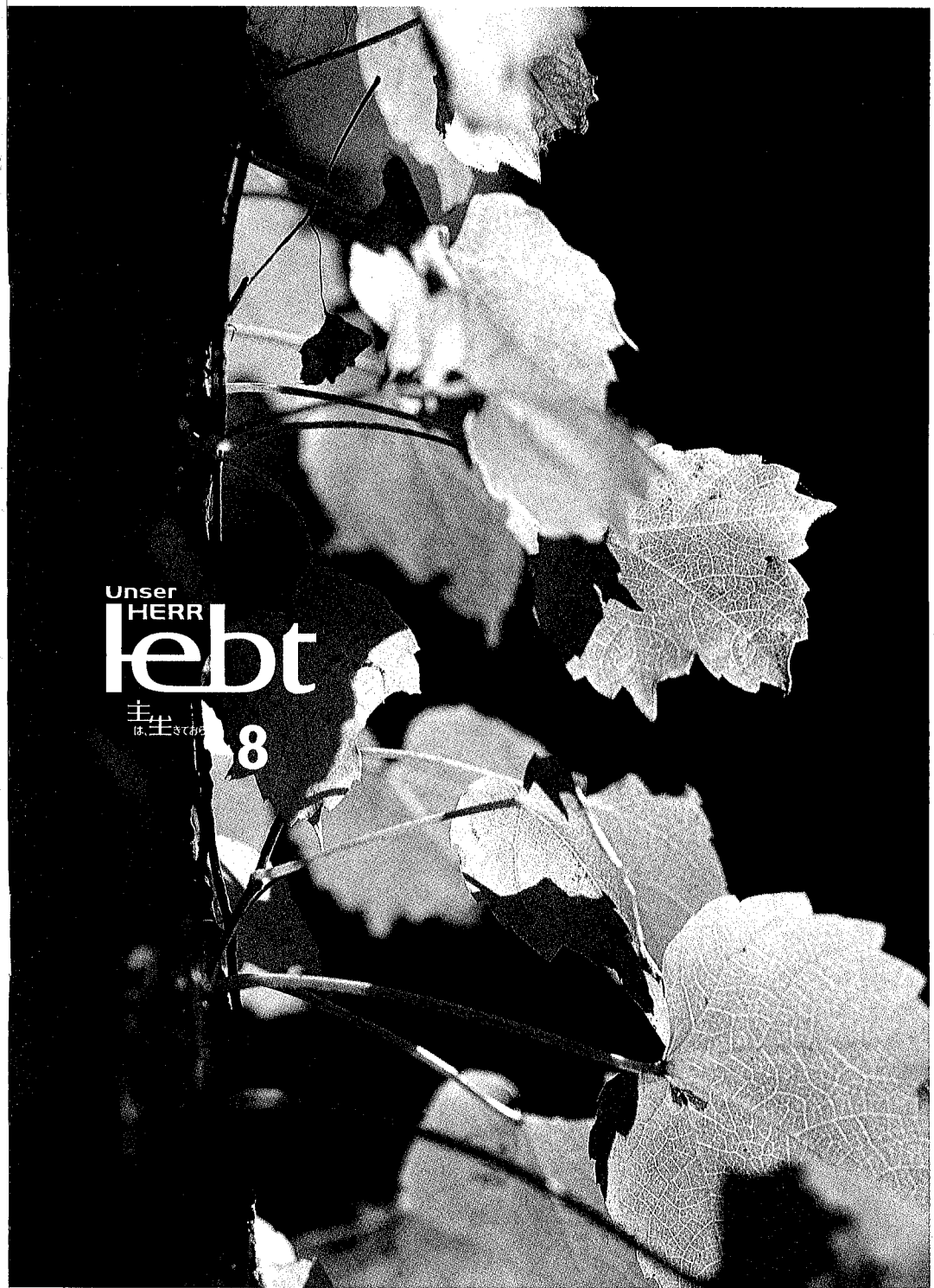
主は、生きておられる

Unser HERR lebt

graph. magazine
vol.8 | 2004

INDEX

巻頭メッセージ	04	「祈りの重要さとまことの礼拝」／ゴットホルド・ベック
5人のメッセージ	16	光は闇の中に輝いている／久田 博
	22	父の死、永遠のいのち、家族の救い／岩本 秀造
	28	永遠への入り口／野口 修
	34	ほんとうのクリスマス／佐山 孝治
	40	キリストとともに死に、キリストとともに生きる／羽石 真二
連載メッセージ	46	［モーセの十戒］第8回 神の聖なる戒め／ゴットホルド・ベック
5人の証し	58	主は、知らない道を歩ませてくださいます／古田 公人
	64	主が与えて下さった恵み／藤田 匡
	66	主のいのちをいただいて／藤田 信子
	68	永遠のいのちを生きる幸せ／重田 都代子
	79	ドイツ勤務で体験した主の守りと導き／和田 宗勝
	82	メッセージ当番表 2004年12月～2005年 3月
	86	よろこびの大会予定表
	87	インフォメーション・ボックス
	88	海外よろこびの集いから
各地の集会から	90	こちら広島集会で～す
	92	結婚・葬儀の報告
ケーキ	94	アプフェル クーヘン
	98	キリスト集会へのご案内
	100	本の紹介
	102	全国の集会住所録





祈りの重要さとまことの礼拝

ゴットホルド・ベック

さて、使徒たちは、イエスのもとに集まって来て、自分たちのしたこと、教えたことを残らずイエスに報告した。そこでイエスは彼らに、「さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行って、しばらく休みなさい。」と言われた。人々の出入りが多くて、ゆっくり食事する時間さえなかったからである。そこで彼らは、舟に乗って、自分たちだけで寂しい所へ行った。ところが、多くの人々が、彼らの出て行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ徒歩で駆けつけ、彼らよりも先に着いてしまった。

イエスは、舟から上がられると、多くの群衆をご覧になった。そして彼らが羊飼いのいない羊のようであるのを深くあわれみ、いろいろと教え始められた。そのうち、もう時刻もおそくなったので、弟子たちはイエスのところに来て言った。「ここはへんぴな所で、もう時刻もおそくなりました。[illegible]解散させてください。そして、近くの[illegible]食べる物をめいめいで買うようにさせ[illegible]」彼らに答えて言われた。「あなたがたが[illegible]ちに何か食べる物を上げなさい。」そこで弟子たちは言った。「私たちが出かけて行って、二百デナリものパンを買ってあの人たちに食べさせるようにしましょうとでしょうか。」

するとイエスは彼らに言[illegible]はどれくらいありますか。行って見て来なさい。」[illegible]いめて言った。「五つです。それと魚が二匹[illegible]なを、それぞれ



組にして青草の上にすわらせるよう、弟子たちにお命じになった。そこで人々は、百人、五十人と固まって席に着いた。するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて祝福を求め、パンを裂き、人々に配るように弟子たちに与えられた。また、二匹の魚もみなに分けられた。人々はみな、食べて満腹した。そして、パン切れを十二のかごにいっぱい取り集め、魚の残りも取り集めた。パンを食べたのは、男が五千人であった。

それからすぐに、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませ、先に向こう岸のベツサイダに行かせ、ご自分は、その間に群衆を解散させておられた。それから、群衆に別れ、祈るために、そこを去って山のほうに向かわれた。

(マルコ6・30～46)

祈りの重要さ

最近、キリスト集会の方々は、口先だけでなく、心から言うようになっています。「祈っています」と。

これはとてもすばらしいことではないでしょうか。人間にとって一番大切なのは「祈り」です。なぜなら、祈れば主は必ず答えてくださるからです。ですから今回のテーマは、「祈りの重要さ」としたいのです。それはまた、「イエス様と私たち」と言いかえることもできます。イエス様と私たち、それはもちろん比べることもできない存在です。でも、少し考えてみる必要があるのではないでしょうか。

それからすぐに、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませ、先に向こう岸のベツサイダに行かせ、ご自分は、その間に群衆を解散させておられた。それから、群衆に別れ、祈るために、そこを去って山のほうに向かわれた。(マルコ6・45、46)

このとき、イエス様は疲れておられたはずですが、寝るため、休むためではなく、「祈る」ために、山のほうに向かわれました。その日は、イエス様がほんとうに力強いみわざをなされた日でした。五千人以上の人々にパンが五つ、魚が二匹しかなかったのです。でも、これだけのパンと魚で五千人以上の人々が「みな、食べて満腹した。」と書いてあります。考えられないことですね。初め、弟子たちはパンが五つと魚が二匹しかないことを知っていました。けれどもイエス様がそれを無限に分け与えられたのです。このことを人々が聞くやいなや、それは、あっという間にみんなの間に広がりました。「イエス様こそ主だ」と、群衆は思ったに違いありません。こんなことは今までなかったことだからです。「イエス様は救い主だ。イエス様は神の子であるに違いない」。このことが突然、群衆にはっきりとわかったのです。

そこで、一群の人々が集まって、イエス様を王様にすることに決めました。イエス様のほうへ近づいてきました。彼らは興奮して、「あなたは救い主です。私たちはあなたを王様として迎えたいと思います。私たちはあなたに従いたい、あなたのために戦います」と彼らは心からイエス様に言ったのです。

イエス様の弟子たちはこれを聞いて喜ばしく思ったことでしょう。「自分たちは今まで、あのパリサイ人たち、聖書学者たちに迫害されてきた。今度こそ、イエス様はわれわれの王になられるのだ。自分たちはその王国の中心人物になる。今までのパリサイ人たちと立場が逆になるのだ」と、弟子たちは喜んだことでしょう。

「それからすぐに」弟子たちはイエス様に呼ばれました。弟子たちは大きな期待を持って、イエス様に近づきました。弟子たちは何か劇的なことが起こるのだと思いましたが、案に相違して、イエス様は弟子たちを船に乗り込ませ、向こう岸へ行くようにと命じられたのです。弟子たちは打ちのめされたような気持ちになりました。これはほんとうにイエス様のお気持ちなのか。しかし、イエス様は彼らをご覧になり、「向こう岸へ行きなさい」と言われたのです。弟子たちは仕方なく向こう岸に向かいました。でも、自分たちの主イエス様を理解することはできなかったのです。

「あなたは救い主だ。私たちの王になってください!」群衆はなおも叫びながら、イエス様のもとに押し寄せました。イエス様は手を上げて群衆を静められました。群衆はイエス様が何を言われるかと緊張して期待しています。イエス様は口を開かれました。**「わたしの国はこの世のものではありません。」(ヨハネ18・36)**そしてまた、「わたしがこの世に来たのは十字架の上で死ぬためであって、この世の王としてたたえられるためではない」ことを、お話しになったことでしょう。

人々はイエス様を理解したでしょうか。イエス様は遠く未来を見つめながら、大きな慈愛をこめて彼らにご自分の犠牲の死の必要なことを説かれたのです。イエス様は、彼らの身代りとしてご自身がいのちを捨てられるとき、本当の救いと解放がやってくるのだ、と言われたのです。ところが人々は、自分たちの願い、この世の国と栄華の夢がすぐにかなえられないことがわかったので、失望して少しづつ家に帰り始めました。それはイエス様にとって何という悲しい別れだったことでしょうか。

イエス様は深い慈愛と憐れみの持ち主でした。イエス様の愛ははかり知れない大きな愛です。人々はパンと魚の奇蹟によって、内心は大きく動かされていました。彼らは帰りながらも、何度もイエス様のほうを振り向いたことでしょう。イエス様も、長い間人々



のほうをご覧になっていたことでしょう。

そして、イエス様はゆっくりと、山のほうへ歩いて行かれたのです。イエス様は父のみこころにかなったお方でした。イエス様はただ父のみこころを行ないたいというたった一つの願いを持っておられました。イエス様はそれこそがもっとも必要であり大切であることをよく知っておられたのです。ですからイエス様は、その生涯にわたって、父との交わりを何ものにもまして大切になさっておられたのです。私たちは、このイエス様を見つめましょう。イエス様が祈りの人であることをしっかりと見ましょう。

それから、群衆に別れ、祈るために、そこを去って山のほうに向かわれた。
（マルコ6・46）

この時、イエス様は非常に疲れておられたに違いありません。一日中、休まずに働き続けておられました。でも、イエス様のお答えに弟子たちは失望せざるをえませんでした。宗教家たちはイエス様を絶えず、攻撃し続けましたし、悪魔もイエス様を駄目にしようとやっきになってかかってきました。イエス様のおられるところ、そこには必ず、悪魔が攻撃をしかけてきます。イエス様のなされることのすべてに対して、悪魔は攻撃を加えてきます。

イエス様は五千人にパンと魚を分け与えたとき、そこには病人もいたに違いありません。病気はしばしば罪を原因としています。ですからイエス様が病気を治される場合、悪魔を追い出さなければならないことが多かったのです。このような霊的な戦いは、非常に疲れるものだったに違いありません。

けれどもイエス様は、横になることも眠りに就かれることもなく、山に登り始められました。イエス様は祈るために一人になりたかったのです。多くの人々は孤独病にかかっているから、一人になることをとっても嫌います。イエス様と逆なんですね。イエス様は一人になりたかったのです。そしてイエス様は、一人になられたのです。これは人間が一人でいる場合、何をなすべきかを表わしています。もしあなたが一日中一人でいるとしたら、何をするでしょうか。まず、一番好きなこと、一番大切なことをするのではないでしょうか。イエス様もまた、一番大切なこと、一番好きなことをなさったのです。イエス様は「祈られた」のです。イエス様は「祈りが一番大切である」ことをよく知っておられました。イエス様は自分ひとりでは何ひとつやりたくない、と心に決めておられました。ですから父なる神との交わりが一番大切なことでした。イエス様にとっては、父なる神との交わりは一番好ましいことでした。だからイエス様は祈られたのです。

さて、イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。　（マルコ1・35）

イエス様は朝早くまだ暗いうちに起きて、祈られのです。

しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。　（ルカ5・16）

荒野はとても寂しいところです。けれども一人になろうと思えば、やっぱり荒野に行かなくては、とイエス様は思われたのです。祈るために。

このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。
（ルカ6・12）

イエス様は夜じゅう祈られました。夜が明けるまで。

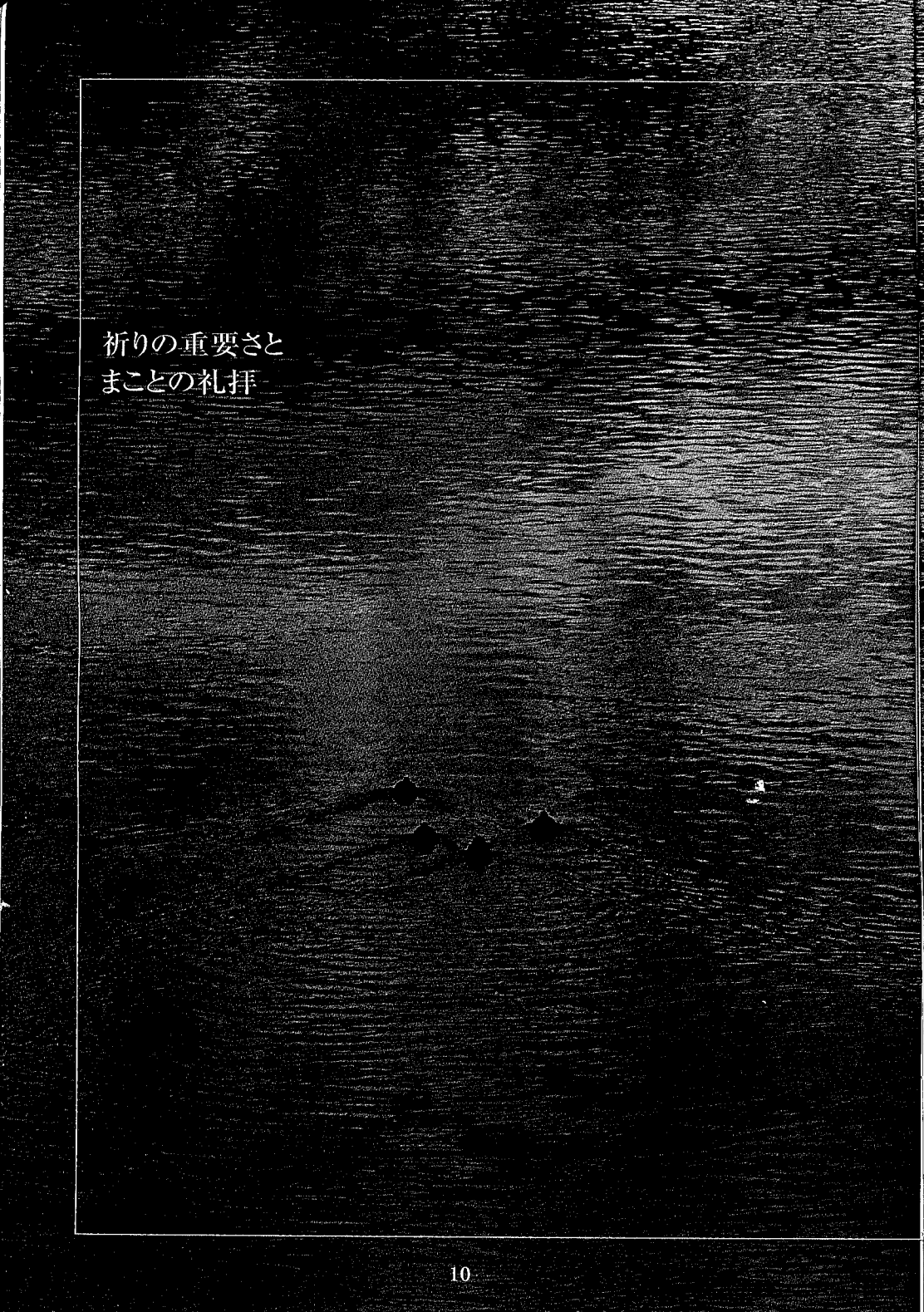
これらの教えがあってから八日ほどして、イエスは、ペテロとヨハネとヤコブとを連れて、祈るために、山に登られた。祈っておられると、御顔の様子が変わり、御衣は白く光り輝いた。（ルカ9・28、29）

また、イエス様は、弟子たちから石を投げて届くほどの所に離れて、ひざまずいて、次のように祈られました。

「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」　（ルカ22・42）

まことの礼拝

聖日の朝に、ときどき経験することですが、集会での礼拝が、礼拝でなくなっていることがあります。「礼拝」でなくて、「祈り会」になっているのです。礼拝においては、「自分のために」、また「人のために」祈る必要はありません。礼拝の中心はあくまで十字架の上で犠牲になり、私たちの代わりに死んでくださった「イエス様」であるべきなのです。イエス様の犠牲について、またイエス様の愛について思いをひそめ、へりくだって心から祈ると、集会中が感謝でいっぱいになり、喜びがわきあがってきます。ですが、どなたかが自分のことを声高に祈っても、人のことについて祈っても、イエス様だけを中心に祈ったときのような喜びは、わいてこないでしょう。また、祈りの中に説教、個人的な体験、考えなどが入っていることも、決して適切ではありません。礼拝の祈りとは、あくまで主イエス様だけに向かって捧げられるべきです。十字架の救いのみわざをなし遂げてくださったイエス様、よみがえられて今も神の右の座について支配しておられるイエス様、近いうちに来てくださるイエス様への感謝と賛美だけが、礼拝の中心であるべきです。



祈りの重要さと まことの礼拝

ですから賛美の歌も、イエス様の十字架の救いのみわざをたたえる歌、主の全能の力と栄光をたたえる歌、また再臨を待ち望む歌を選ぶべきなのです。救われるための招きの歌は、礼拝のときには適当とは言えません。さらに、讃美歌には、礼拝にふさわしい歌がいっぱいあるのですから、それらの中から、賛美するようにしましょう。

次に、集会の準備についてですが、礼拝のテーブルには、年配の、奉仕されている兄弟がたが着くべきです。

「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである。」ということばは真実です。ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。——また、信者になったばかりの人であってはいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。また、教会外の人々にも評判の良い人でなければなりません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。執事もまたこういう人でなければなりません。謹厳で、二枚舌を使わず、大酒飲みでなく、不正な利をむさぼらず、きよい良心をもって信仰の奥義を保っている人です。

（Iテモテ3・1〜9）

聖餐についても、ときどき安易になされているのを見ることがあります。パン裂きとは、ただ皿の上に、手早くパンを千切って並べればよい、といったものでは決してありません。ぶどう液の扱いも同様です。年配の兄弟がイエス様がなさったことをしのびながら、パンを裂き、ぶどう液を注ぐべきなのです。では、主イエス様がどのようになさったのか、聖書から見てみましょう。

そしてイエスは、杯を取り、感謝をささげて後、言われた。「これを取って、互いに分けて飲みなさい。あなたがたに言いますが、今から、神の国が来る時までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」それから、パンを取り、感謝をささげてから、裂いて、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです。わたしを覚えてこれを行ないなさい。」

食事の後、杯も同じようにして言われた。



「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。」
（ルカ22･17～20）

全国の集会の礼拝が、もっともっと主によって喜ばれるものとなるために、ただ主イエス様だけに捧げられるようにと祈りましょう。

イエス様の祈りと礼拝

イエス様の祈りは、ほんとうは祈りではなかった。「礼拝」でした。「わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」イエス様はなぜ、このように祈られたのでしょうか。弟子たちの模範となるために祈られたわけではない。「霊とまことをもって」祈られたのです。また、深い要求を感じたままに祈られたのです。

イエス様はなぜこのように祈られたか、次のことが言えます。

第一番目に、イエス様は父なる神の栄光のために祈られました。

二番目に、イエス様は父なる神との交わりを持つために祈られました。

三番目に、イエス様は父なる神との交わりによって父のみこころを尋ね、知るために祈られたのです。イエス様はよく、「わたしは何も知らない、何もできない」と言われました。ですからイエス様は祈られたのです。

四番目に、イエス様は、人々に主の力と主の贈り物を与えるために祈られたのです。イエス様の祈りはほんとうの祈りでした。父なる神の栄光のために、主の豊かさとあわれみから、愛と恵みをくみ取る祈りでした。イエス様は要求を深く感じたゆえに祈られたことを、私たちはヘブル人への手紙にはっきりと見ることができます。

キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。
（ヘブル5･7）

イエス様は、しばしば静かな孤独、荒野、寂しい場所、また山などに行かれました。このようなところでは、イエス様はもはや世の中のざわめきを聞くことがなく、誰も見ることがなく、誰にも邪魔されず、ご自分の心を父なる神の御前に注ぎ出すことができました。イエス様はしばしば夜通し祈り続けられましたから、非常に多くのことを父と話されたのです。そしてその後に、イエス様はまた再び人々の生活の中に戻ってこられました。ですから多くの人々が、「イエス様は権威を持って語られる」と証ししたのです。

イエス様はいつも忙しく動いておられました。イエス様からあふれ出てくる愛は、多くの人々をひきつけ、イエス様がなされた奇蹟としるしを知らない人はありませんでした。ですから、いつも助けを求める人々がやってきました。イエス様は、日々、その肩にのしかかる多くの仕事の中にあって、祈るために静かな時をおつくりになりました。

多くの人は、祈る時間がないと言います。それはうそです。つくろうと思えば必ずつくれるのです。イエス様はいつも祈るための時間をおつくりになったのです。ですからイエス様は、あらゆる戦い、あらゆる困難の中にあっても、いつも元気で喜んでおられ、また力強くあられたのです。心からの、また絶えることのない父なる神との交わりが、イエス様の休息だったのではないでしょうか。

イエス様は特に重要なことに直面したとき、心から大胆に、率直に、絶え間なく祈られました。たとえば、弟子たちを選ぶ前、また十字架の苦しみの始まる前に、イエス様は祈られたのです。イエス様はご自分のたましいが父のうちに完全な休息を得るまで、安らぎを得るまで祈り続けられました。

このような心からの祈りの後で、イエス様は勝利を確信して行動することがおできになられたのです。心からの祈りの後で、イエス様は悩むことも、耐え忍ぶことも、重荷を負うこともおできになられたのです。イエス様はひたすら父のみこころを行ないたいと思われましたし、またそれを行なわれたのです。

イエス様は、二千年前に祈られただけではありません。今日もまた祈っておられます。昼も夜も、人間ひとりひとりのことを考えて祈ってとりなしてくださっています。イエス様は私たちのわがままのために十字架に釘付けにされただけではなく、私たちのために生きておられ、今もとりなしていてくださるのです。イエス様の十字架のみわざのゆえに、私たちは、罪の赦しの確信を持つことができます。イエス様は勝利を完了なさり、すべてを父の栄光に帰せられました。今日、天で大祭司として私たちのために祈り、私たちのことをいつも見つめて愛しておられるのです。

イエス様は、ご自分のみからだである教会、信じる者の群れの「かしら」である、と聖書は強調しています。「かしら」はいつも信仰の中心です。ですからイエス様は、今日も私たちのために悩み、祈ってくださっているのです。

したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。
（ヘブル7･25）

イエス様はいつも生きておられ、私たちのことを考えて、とりなしていてくださる



のです。

ここまで、私たちはイエス様について見てきました。おわりに、少しだけ私たちのことについて考えてみたいと思います。

ドイツにはこんな歌があります。「祈らないために、何と多くの良いことが失われていくことだろう。失われたものがどれほど大きいか、誰も言い表わすことができない」。私たちが天国に行ったらわかるでしょう。「もっと祈っていたら、主はもっともっと大きなわざを成すことがおできになった」と。

祈りのない兄弟姉妹は、みじめです。祈りのない兄弟姉妹は、哀れむべき存在です。祈りのない兄弟姉妹は、喜びがありません。祈りのない兄弟姉妹は、実を結びません。祈りのない兄弟姉妹は、救霊者とはなりえません。イエス様のために、どれほど働いたとしても、「祈り」に代えることは決してできません。イエス様との親しい交わりがなくても、私たちはもちろん、集会をもったり、人を導いたり、本を配ったり、救いの道を説くことはできるでしょう。しかし、もしイエス様との交わりがないのなら、「みこころにかなった生活」をすることはできません。いかに多くのイエス様のための働き、ご奉仕があったとしても、それらは、「祈りに」に代わるものではありません。

イエス様は心から望んでおられます。「あなたと、いつも交わりを持ちたい」と。確かにイエス様は世界の創造者であり、見えるもの見えないものすべてをお造りになった方ですが、私たち人間のために悲しんでおられます。イエス様は、あなたを思っておられます。私たちひとりひとりとイエス様は交わりを持ちたいと思っておられます。私たちもこれと同じ要求を持っているなら、イエス様との交わりを持つことができるようになります。

イエス様は、確かに祈り人でした。私たちはいったいどうでしょうか。私たちの祈りの生活は、どんな状態でしょうか。私たちが祈らなくなる理由は、いったいどこにあるのでしょうか。祈りを妨げるすべての邪魔物は取り除かれなければなりません。主の前に、次の質問についてゆっくり考えてみましょう。まず、自分の祈りの生活は、罪によって力の無いものとなっていなかったでしょうか。自分の祈りの生活は、不信仰や気まぐれ、生活のあせりなどによって妨げられていなかったでしょうか。自分の祈りの生活は、まったく実りがなかったのではないでしょうか。自分はいつもイエス様との交わりを持っていて、人々のたましいを救う愛にあふれているでしょうか。

私たちは祈るとき、自分のこと、仕事のこと、自分の家族のことだけを祈っているのではないでしょうか。全世界のためにも祈っているでしょうか。自分の祈りの生活は、思い煩いによって弱いものになってはいないでしょうか。私たちは、祈りによって大きな仕事をすることができるのです。それをいつも覚えているべきです。もしもそれを信じないなら、悪魔の勝利にのみこまれてしまいます。

また、私たちの祈りの生活は、成長しているでしょうか。私たちは毎日、祈りの意味と力を、よりよく学んでいるでしょうか。

これらの問いに対する私たちの答えは、どうだったでしょうか。私たちは、今日、「祈り人としてのイエス様」を学びました。イエス様の祈りの生活を理解することは、私たちにとって大変むずかしいことです。イエス様は神の御子であったにもかかわらず、夜通し祈られなければならなかったことを見ても、それがわかります。

私たちの生活の失敗は、そのすべてが「祈りがなかった」ことから来ています。私たちは、「祈りによってすべてが可能になる」ことを確信すべきです。もし私たちが祈るなら、必ず、多くの人々は導かれます。もし私たちが心から祈るなら、家族の者は救われます。そのことを私たちはみな、知っているはずですが、それを知りながらどうしてこんなに少ししか祈らないのでしょうか。イエス様に対する祈りを妨げている一番の大きな原因は、私たちが、自分の計画、自分の考え、自分の見解、自分の目的を捨てようとしないからです。ですから私たちは、主に向かって自分が開かれていないのです。私たちは主イエス様の持っておられる目的、計画、方法、考えなどを、そんなに大切に思っていないのではないでしょうか。

主は私たちとの生きた交わりを望んでおられます。「組織された交わり」は、もちろん交わりではありません。組織です。組織は形式であり、冷たく親しみがない。組織は実りがなく、喜びがなく心は空っぽです。これが多くの人々、また多くの教会の悩みなのではないでしょうか。

交わりは愛の目的です。イエス様はあなたを愛し、あなたのためにご自身をささげられました。敵のために死ぬよりも大きな愛はありません。イエス様はそれをなさったのです。私たちがまだ悪魔の奴隷であったときに、イエス様は私たちを愛し、私たちのためにご自身のいのちを犠牲にされたのです。イエス様はそのように私たちを愛しておられますから、当然、私たちとの交わりを求めておられます。私たちはイエス様を心から愛しているでしょうか。

イエス様は今、この私に何を望んでおられるかを、よく考えてみましょう。どこへ行っても、どういう仕事をしても、どうしたらイエス様に喜んでいただくことができるかを、もっとよく考えるべきです。これこそ何事にもまして一番大切なことです。

イエス様は、「心から祈られた」お方です。「祈り人」そのものでした。そしてイエス様は今、そういう「祈る人」を捜し求めておられます。

永遠のささげ物

約2000年前に起きた次の出来事、―イエス・キリストがゴルゴタの丘に立てられた十字架の上で尊い犠牲の死を遂げられたこと。そしてその3日後に復活されたこと。― この事実については、きっと多くの方がご存知のことと思います。そして、それは「はるか昔に遠い中東で起きた、日本人の私たちとは何の関係もない歴史的な出来事」と思っておられる方もかなり多いのではないでしょうか。

しかし、実はそれは大きな誤りです。私たちに無関係どころか、まさに私たちに直接的に、そして最も深く関わる大事件だったのです。それは永遠の滅びに向かっていた私たちの救いのためであり、私たちが尽きない喜びをもって神とともに永遠に生きることができるようになるための、人知をはるかに超えた愛の御業だったのです。

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。(1ペテロ　2･22～24)

天地万物を創られた神のひとり子であるイエス・キリストは罪とは全く無縁の方、完全に聖なる方であり、不可能なことは何一つないお方でした。にもかかわらず、神の御位を捨て、卑しい人間の姿を取って地上に降りてきてくださり、最後には「自分から」十字架の死にまでも従われました。このイエス様の死と3日後のよみがえりによって、私たち人間に「罪の赦し」が、そして神を信じる者には「永遠のいのち」が与えられることになり、ここに救いが完全に成就されたのです。

聖書にはイエス様が文字どおり、ありとあらゆる拷問、侮辱、迫害に耐え抜かれたことが記されています。その痛み、苦しみが、一体どれほどであったのかは、想像することさえできません。しかし、そういった肉体的な苦痛をはるかに超えてイエス様を完全な孤独と絶望の淵に追いやった事態が生まれたのです。

「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」(マルコ　15･34)

この悲痛な叫びは、イエス様があのゴルゴタの丘で十字架にかけられた時、全人類の罪を贖うためにすべての罪を一身に負わされ、罪の塊とされた時に発せられたのです。

父なる神によって完全に見放された瞬間に発せられたこの叫びは、どんな肉体の苦痛にも比較にならないほどの、耐えがたい孤独と絶望の叫びです。

しかし、いったいなぜ、神様はご自身が心から愛しておられた、何の罪もないひとりご[illegible]に対して、この[illegible]を捨てよ、というとんでもない命令をされたのでしょうか。さらに[illegible]の御子であるお[illegible]の苦しみをも甘受して死にまでも忠実に従われたのでしょうか。「十字架の死」にまで行き着かざるを得ない根本の理由が、実は私たち人間にあったのであり、また問題解決の方法もこれ以外になかったからなのです。

人間の本質　―罪―

そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、――それというのも全人類が罪を犯したからです。(ローマ　5･12)

はるか昔、神様によって創られた初めの人間アダムが罪を犯したことにより、全人類に罪が入った、と聖書は言っています。ところで「罪」とは一体何なのでしょうか。それはこの世で言われているものとは違います。罪とは「神様に逆らって、自分中心に生きる態度」のことです。自分の力に頼り、わがまま勝手に生きることが聖書で言う「罪」なのです。神によって創造されたアダムも、またその妻エバも、初めは神を恐れ、神の命令を忠実に守って生きる者でした。けれども、神から[illegible]

光は闇の中に輝いている

神に反逆した瞬間であり、同時に『罪』が人に入った瞬間でもあったのです。このたった一度の行為によって、創り主と創られた者との親しい関係は完全に壊されたのです。まさに人間にとっての不幸の始まりです。

神のない人生は何の望みもない暗闇の人生です。たとえそこに望みがあるように思えたとしても、その実態は虚しさでしかありません。けれども、残念ながら光に出会うまで私たちはそのことに気付かず、ただこの世の空虚な望みをやみくもに追い求め続けるのです。

神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。(1ヨハネ　1・5)

闇の中に暮らしていて、光の存在を知らない人は、自分が闇の中にいるという認識さえも持ち得ません。そして、光を求めることを拒み続けるかたくなな態度こそが、すべての不幸の原因であることにも、もちろん気付くことはできないのです。

主はこう仰せられる。「知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。わたしは主であって、地に恵みと公義と正義を行なう者であり、わたしがこれらのことを喜ぶからだ。――主の御告げ――(エレミヤ　9・23,24)

誇るな、というみことばに反し、しばしば私たちはすぐに誇ってしまうのです。たとえそれが偉大な神の目から見れば全く無に等しいような、ちっぽけな知恵、取るに足りないほどの力、富であったとしても、です。しかし、この誇る心、高慢な思いこそが神様の最も嫌われることなのです。人が高慢になる時、そこには神様は完全に無視され、自分の思いだけがすべてに勝って優先されているのです。神様に従いながら高慢になることは絶対にありえません。ですから、高慢とは自分が神様と正しい関係にあるかどうかを知ることのできるバロメーターと言っていいのではないでしょうか。イエス様は人の心に関して次のように言っておられます。

また言われた。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」(マルコ　7・20～23)

神様から離れた人の心は、このようなものです。他の人を思う心は微塵もないのです。

今、社会では思わず耳をふさぎ、目を覆いたくなるような事件が毎日起きています。これらを見れば、そのことは明らかです。人間とは暴力で、また、時には冷たい言葉や態度によって他人を平気で傷つけることができる存在なのです。この性質は、決してある特殊な人間に限ったことでなく、誰にでも備えられております。すべては罪――神様から離れて生きること――の結果と言えます。そしてさらに問題なのは、私たちが自分の罪への自覚がなく、罪に極めて鈍感だということです。

実は、今から17年前に私は心の病で大層苦しみました。その渦中にある時は、文字どおり自分のことだけしか考えられず、明けても暮れても自分、自分という有様でした。

お陰で家の中は完全に真っ暗闇の状態になりましたが、当時、いつも私が思っていたことは、自分のこのみじめな状態を何とかして欲しい、ということだけだったのです。まさか、この状態に陥ったのは他の人のせいではなく、環境のせいでもなく、ほかならぬ自分のせいだとは、夢にも思いませんでした。

しかし、罪に対しての自覚が皆無と言ってよかった私が、自分自身の罪をはっきりと思い知らされる時が来たのです。それは私が神様を知り、病気からも回復して、職場復帰もできた後のことです。きっかけは集会のメッセージの中で話された次の一言です。「神様は人間のメンツ(プライド)を一番嫌われるのです」。

確かに仕事と職場の人間関係で悩み、うつ病になったのは事実です。けれどもそこに至った究極の原因は、まさしく自分のメンツ(プライド)だったのです。

神様が一番嫌われるものであり、何の益にもならないプライドにしがみついた結果、一人でもがき苦しみ、弱り果ててしまったのです。妻に、そして子供たちにまで本当に辛く悲しい思いをさせてしまったのは、自分のわがままのせいだったのか、と悟らされました。

すべては自分の罪の結果であり、こんな愚かな私のためにもイエス様はいのちを捨ててくださった、十字架の意味はこれだったのか、とようやく気付くことができたのです。

主への感謝の思いで一杯になったことを思い出します。

このように、私たちの罪はそれほどに重く、深く、どんなにあがいても自分では絶対に消すことができないものなのです。だからこそ神様は本当に最後の、究極の手段としてイエス様に「身代わりの死」という残酷極まりない命令を下されたのです。

それは悩み抜かれた末の決断であったに違いありません。前にも触れたように、

光は闇の中に輝いている

に人間が神に逆らった時点で、創り主と被造物との親しい関係は完全に断絶状態になりました。そして、このことを最も悲しまれ、最悪の関係を元に戻したいと切に望まれたのは、ほかならぬ父なる神であり、御子イエス様だったのです。その一方、人間はと言えば、本当に長い間、自分の勝手気ままに生き、神に逆らい続けていたにもかかわらず、です。

このように父なる神やイエス様の思いは、私たちの思いをはるかに超えてあまりにも高く、深いのです。この大きな憐れみと愛と恵みに対し、私たちにできることはただ感謝を捧げることでしかありません。

主は赦そうと待っておられる

「怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ。」とあなたを贖う主は仰せられる。
(イザヤ　54･8)

新約聖書には、親に分け与えられた財産を持って家を飛び出し、放蕩の限りを尽くした後に、父のみもとに戻る息子の話が記されています。自分の思いどおりのことがしたい、本当の自由が欲しいと父のもとを飛び出した息子は、やがては破綻寸前にまで追い詰められ、ようやく父のみもとに立ち返る決心をします。心から悔い改めた後、無残な姿で戻ってきた息子を父は遠くから見つけ、大喜びで走り寄り、あふれる愛の手で抱きかかえられたのです。神に背を向けて生きる私たちのたましいは、この息子のように破綻寸前の状態にあるのです。だからこそ今すぐにでも悔い改めて父なる神のみもとに立ち返る決心をしなければなりません。そうすれば主は私達の罪を豊かに赦し、永遠に変わらぬ愛をもって憐れみ、迎え入れてくださるのです。

たましいの救い

「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。」(マタイ　9･12)

「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません。」(ヨハネ　6･35)

本当に多くの人たちが悩み、疲れ、孤独で、そして病んでいます。かつてはゆっくりと流れていた時間ですが、人々は今では時間に追われ、ストレスにさらされ、自分のことで精一杯です。このような状況の中で、果たして

得ることができるでしょうか。いや、私たちの罪の問題を根本から解決して下さった方、主イエス様のもとに行かない限り、それは絶対に無理なのです。

イエス様は医者です。完全に絶望している魂に大いなる慰めと生きる希望を与えることのできる方、嘆き悲しむ人を喜び踊る人に変えることができる方、落胆している人に勇気と力を与えることができる方、虚しいものに望みを置く人に、本当の望み、まことのいのちを示してくださる方です。そのイエス様が、また次のように呼びかけておられます。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」(マタイ　11･28,29)

私たちのすべての罪は、すでに十字架の犠牲のゆえに赦されているのです。ですからイエス様は「今のそのままの姿でいいから、わたしのところに来なさい。」と、一人一人に呼びかけておられます。人がこの世で生きていく上で、悩みや苦しみはつきものです。

のことも、実はあなたがイエス様に近づくために備えられた大きなプレゼントなのです。同時にすでに信じた者にとっては、それはイエス様のすばらしさをもっともっと、より良く知ることができるための主の恵みでもあるのです。

イエス様を信じすべてを委ねることさえできれば、たとえ厳しい状況は以前と全く変わらなくても、不安や恐れはすべて消え去り、心の中はただ主にある平安だけで満たされる、という考えられない恵みを経験できます。光は闇の中にいつも輝いているのです。

あなたが喜びに満ちた人生を生きることができるように、今も生きておられ、私たちのたましいの牧者であるイエス様のこの呼びかけに、どうか今すぐに従って下さい。

久田　博
国際基督教大学人事部長
常盤中、浦和高、慶應義塾大学
経済学部卒。
(株)富士銀行に勤務後に現職。



光は闇の中に輝いている

父の死、永遠のいのち、家族の救い

祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ。
(伝道者　7･2)

今年の6月18日、父吉造が天に召されました。直腸癌が背骨に転移し、約半年間、厳しい痛みとの闘いでした。原因不明の痛みから始まり、入院、検査、病名の告知、痛みへの対症療法、そして死、葬儀、納骨。次々と迫り来る厳粛な事実に直面させられ時は容赦なく過ぎていきました。父の死後、数々の思い出と共に、「父は天国へ行ったのだろうか」、「しかり」という自問自答が頭を駆け巡っていました。

十数年前、私がこの集会に集いはじめた頃、両親と共に長野のあるクリスチャンのお宅を訪れ、すがすがしい空気の中での語らいの中、父が「いつか家族全員をこのような集会を行う場所に連れてきたい」と語ったこと。集会で歌われる賛美の歌が好きで「葬儀にはこういった曲を」と書き残したこと。自分の死にこだわり、集会の葬儀を何度か訪れ、葬儀はこのようでありたいと願って「自分の葬儀に坊主と戒名は不要。無宗教で」と書き残したこと。病床で「この期に及んで神にすがるなんて調子の良いことか赦されるのか」と言いつつ「赦し」を求めたこと。また、「すまなかった」「ありがとう」という言葉の連続で、かつての頑強な性格は柔和さへと変えられていったこと。そんな折、ベック宣教師がお見舞いに来てくださり、「お父さん、前向きに生きましょう。人生にはいろいろ面白くないことがあったでしょう。けれど今までのことをすべてご存知の方がいらっしゃいます。その方が私たちの罪のために身代わりとなってくださったからありがたい。死は決して終わりではありません。」という内容の話をされた際、心から主を受け入れ大きな声で「アーメン」と祈りました。このように父は集会に通い続けたのでもなく、洗礼を受けたわけでもありませんが、激しい苦しみの中にあっても心に平安が与えられたことを確信しております。

神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。(詩篇　51･17)

父は十代で特攻隊を志願。出撃間近で終戦。戦後味わった挫折と試練の数々。こうした体験から「この世に神も仏もあるものか」を信念とし、神仏を拝もうとしませんでした。心から頼れるものが「そこ」にはないと思ったからでありましょう。戦争という激動の時代の中、若くして死ぬことを覚悟した父、戦後約六十年間もの時は抜け殻であったと言えるかもしれません。こうした中で耳にした聖書の言葉、すなわち、「罪」「希望」「救い」「感謝」「平安」イエス様の「十字架」などは、

確かに耳新しく、驚きであったでしょう。最後まで信仰には疑問だらけでしたが、そこに「何か良きものがある」ことを認めていました。

諸国の民は地の果てから来て言うでしょう。「私たちの先祖が受け継いだものは、ただ偽るもの、何の役にも立たないむなしいものばかりだった。人間は、自分のために神々を造れようか。そんなものは神ではない。」と。(エレミヤ　16･19,20)

「だから、見よ、わたしは彼らに知らせる。今度こそ彼らに、わたしの手と、わたしの力を知らせる。彼らは、わたしの名が主であることを知る。」(エレミヤ　16･21)

病床ではきれいな目をしていました。病室の天井をじっと見つめ、自らの過ちを悔い、弱さを自覚し、今度こそ訪れた自分の死を思い、常に家族のことを心配していた父も最期は自らの魂の救いを求めていたようでした。あと数日の命と告げられ、声をかけても反応しなくなった時「もうすぐ天国だね」と語りかけると、目を見開いて私の声を聞いていた表情を今でもはっきり覚えています。本当に父との幸いな時でした。

神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。(伝道者　3･11)

あなたは人をちりに帰らせて言われます。「人の子らよ、帰れ。」(詩篇　90･3)

私たちも遅かれ早かれ自らの肉体の死と向き合い、同じような体験をすることでしょう。日常のあわただしさにあってこうした思いに至ることは稀でしょうが、ふと永遠と自分との関係に思いを馳せることがあります。「死んだらどうなるのだろう」。

父の死、永遠のいのち、家族の救い

過去から未来へ刻まれている時。晴れた夜空のように無限に広がる空間。私たちはその中に置かれた一点の存在。私たちの地上の命は何と短くはかないものでしょうか。たとえ自分は幸福で充実な日々を過ごしていると思っていても、心の中ではふと人生のはかなさを思うものです。もし、人生が死で終わりであればこれほど耐えられないことはありません。

この世に生を受けた私たちは死と向き合う時、そこに真実なるもの以外はすべて価値を失います。このような意味で自分にとって深い悲しみ、例えば、自分の家族の死は自分の存在を問う大切な時と言えましょう。この「家族」には友人、知人も含められるでしょう。

聖書の一つのテーマは「死は終わりではない」であります。

この宇宙、万物の中でちっぽけな私たち一人一人に心を留めてくださる方がおられます。この方こそ私たちを一人一人お造りになった方。そしてこの地上に来られ、私たちを愛するが故に身代わりとなって十字架上で死なれ三日後によみがえられたイエス様であります。

聖書には、自分の弱さを正直に認め、心から救い主に救いを求める者は自らの過去の問題が清算され、もはや「罪に定められない」とあります。創造主なる方からの無償の救いの提供は何という恵みでありましょうか。人生には好むと好まざるとにかかわらず私たちには解決できない問題があります。それは「罪と死の問題」です。

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。(ローマ　7･24)

こういうわけで、今は、キリスト･イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト･イエスにあ

る、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。
(ローマ　8･1,2)

私たちはどんなに良い行いをしても、また法律を犯したことがないと思っている人でも「自己中心」、「わがまま」という潜在的な性質、すなわち創造主なる神に逆らおうとする「罪」を宿しています。

究極のところ自分の最大の敵は自分の自我であります。かく言う私たちの正体は何でしょうか。肉体の死への恐れ、良心の呵責、この間に立ち尽くしているのが自分の本来の姿と言えるのではないでしょうか。こうした孤独で無力な「自分」という存在は一体誰に拠り頼むことができるのでしょうか。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト･イエスにある永遠のいのちです。(ローマ　6･23)

キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。
(1ペテロ　3･18)

この問題を既に解決してくださった方がおられます。その方こそ人格をもった神、救い主イエス様であります。イエス様に心から罪を認めて悔い改めれば、「永遠のいのち」は無条件に与えられます。私たちにとって幸いなことは自分の思いにこだわり続けて生きるのを止め、私たちの罪の犠牲となってくださったイエス様に感謝しつつ歩むことです。

私たちは様々な試練に遭遇します。時に自分では解決できない問題の前に立ち尽くすでしょう。しかし、実はそのことは主から与えられた最善の道なのであります。それはさらに大いなる恵みを与えるための私たちには想像を超えた主のご計画なのです。

この主の御業を思うとき、忘れてはならないことがあります。それは「家族の救い」であります。この魂の救いのご計画は決して私たちだけに留まりません。自分の救いは最終目的ではなく「家族の救い」への目的の始まりです。私たちの人生の目的とは何でしょうか。財産でしょうか、地位や名誉でしょうか。そのような目に見えるものではなく、主イエス様と共に家族の救いを祈り、待ち望みながら歩むことではないでしょうか。**「涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう」(詩篇126･5)**のみことばにあるとおりです。信仰は決して家族かイエス様かの選択ではありません。家族の救いは聖書の約束ですから。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
(使徒　16･31)

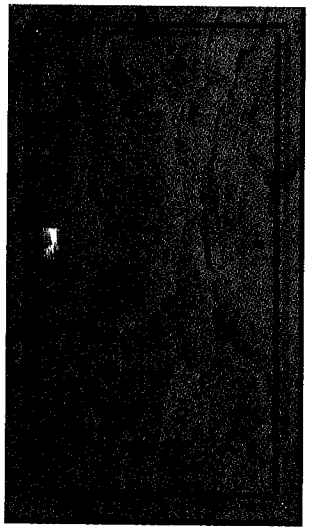
父の死、永遠のいのち、家族の救い

それで神は私をあなたがたより先にお遣わしになりました。それは、あなたがたのために残りの者をこの地に残し、また、大いなる救いによってあなたがたを生きながらえさせるためだったのです。
(創世記　45･7)

岩本秀造
(株)日立製作所勤務。
八坂中、都立井草高校、中央大学卒業。

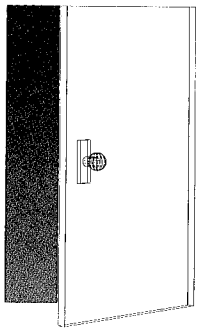


永遠への入り口



ある末期がんの患者が、イエス様への信仰を持つ医師と出会ったときの会話です。

「ここにくるまでが大変でした。」（患者）
（黙ってうなずく医師）
「去年の今頃は、こんな病気になるなんて考えても見なかったんです。なんだか具合が悪いと思っていたら、入院しなくちゃならなくなって。もう、手術もできない、抗がん剤を使うって言われて。何にも考えられなくなりました。」
――つらかったですね。（医師）
「50年住んだ家を手放したり、娘のいる東京に引っ越したり。知り合いにも何にも言わないで出てきたんです。『東京に行くなんていいわねえ』なんて言われて。無我夢中でした。
こんな酸素ボンベをいつも吸ってないと苦しくて、こんなんじゃどこへも行かれやしません。この歳になってからこんなことになるなんて。」
――悔しいですか。
「悔しいよりも、情けなくて。今までできたことが、だんだんできなくなって、もう、これで終わりになるのかなあ、と思うと。今まで何のために暮らしてきたのか、わからなくなってしまいました。今は、東京の狭いところに移って、娘や孫たちが近くにいるからそれだけでもよかったと思うように自分で言い聞かせています。でも、これがいつまで続くのでしょう。」
――こんなことになってしまった、ということを受け入れることができますか。
「…。」
――何でこんなことに、とあわれに感じるのではなくて、今の状態をそのまま受け入れることができると、もう少し楽になれると思います。
「近頃はあきらめるようになりました。どうしようもないことってあるんですね。もう、何にもする気が起こらないです。どのみち何にもできないし。」
――聖書は、こうなったからには理由がある、と言っていますよ。
「私が悪いんですか。私は何にも悪いことしてないです。ひどいじゃないですか。」
――いいえ。そういう意味ではなくて、あなたが本当の幸せを見つけるためだ、と言っているんです。
健康も、家も、友人もいつか失われるもの、最後まで頼りにはならない、ということを、あなたは経験なさったでしょう？今のあなたには、本当のものとにせものを見分けることができます。本当のものしかあなたの渇いた心を満たすことはできません。聖書に書かれていることですが、主イエスは**「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る」**（ヨハネ　11-40）と言われました。
「何のことかわかりません。」
――目には見えないけれど生きておられ、いのちとこの世のすべてを支配される方、その方が主イエスですけれども、その主イエスがあなたのことをどんなに愛しておられるか、を知ることができるようになります。そうしたら病気のことも、単にあきらめるだけではなくて、感謝できるようになります。
「感謝ですか。」
――たとえ、今の苦しみを受け入れることができても、悲しみと寂しさがなくなるわけではありません。「残念だ。」というのが精一杯です。でも、感謝できるということは、「ああ、よかった。」と思うことができる、ということです。
「私には遠いことのように思います。」
――本当は今一番近いところにいるのです。主イエスは次のように呼びかけてお



られます。

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」(ヨハネ　11・25)

死ぬ、ということはそれで最後ではありません。地上の歩みが終わるだけです。主イエスは、わたしたちが死んだ後、すばらしい永遠の命へ入ってほしいと招いておられます。

「信じる、といわれても。」

――主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。(ローマ　10・13)

わたしたちを死んだ後の永遠の滅びから救うために、ご自身で十字架にかかられて、わたしたちの罪を赦してくださった主イエスの名を呼び求める人は救われる、と約束されています。

去年の今頃、元気なときにこんな話を聞いてもきっと聞く耳がおありでなかったでしょう。この一年間はつらい経験でしたけれど、それはどうしても一番大切なことを知るようになってほしい、と導かれた結果だったのです。今のあなたなら、ご自分に何が一番必要なのかお分かりでしょう。気休めやむなしい慰めではなくて、本当の希望と平安です。これから迎えなければならない自分の最後のときまで失われない喜びです。

「そんなことがあるんでしょうか。」

――御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ　3・16)

わたしたちにこの地上の命を与えてくださった主は、わたしたちがこのまま滅びるのではなくて、永遠のいのちを持つことができるようにご自分の命を捨ててまでわたしたちを愛してくださいました。

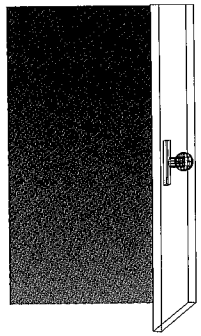
そのことを理解する、というよりは、信じるかどうか、だけが大切です。

「わたしにもできますか。」

――祈ってみましょうか。

「はい。」

看守は「救われるためには、何をしなければなりませんか。」と言った。ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言った。そして、彼とその家の者全部に主のことばを語った。そのあとですぐ、彼とその家の者全部がバプテスマを受けた。全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ。(使徒　16・29～34)



永遠への入り口

私が大切に思っていたものを
主は一つ一つ取り去っていかれる。
とうとう私の手は空っぽになり
素敵に輝くおもちゃは
みんななくなってしまった。

ボロと貧しさをまとって
嘆きながら地上を歩んでいると
主の呼ばれる声が聞こえてきた。
「空っぽの手を差し出してごらん。」と

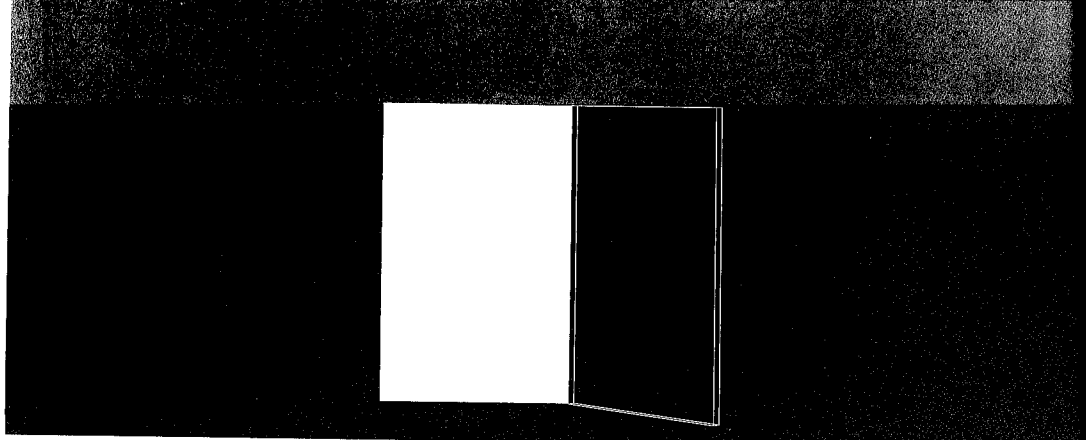
私が両手を天に向かって差し出すと
主はご自身の限りない豊かさを
私の両手があふれるほどに
注いで満たしてくださった。

私のおろかで鈍い心でも
ようやくはっきり悟ることができたのは
私の両手が空っぽでなければ
主は注ぐことがおできにならない、
ということだった。
(マーサ・S・ニコルソン『宝物』)

私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。(ローマ　8・24)

わたしたちの人生に起こってくることのほとんどを残念ながらわたしたちは自分で自由にすることができません。確かに、うれしいことや何とかできてよかったということもあるでしょうが、つらいこと、残念なことも少なくありません。中でも、病気や健康の問題は自分ではどうすることもできないことがほとんどです。そして、人生の最期は誰にでも必ずやって来ます。ゆっくりやってくることもあれば、突然近づいてくることもあります。独力で大きな事業を成し遂げた人にも、社会の片隅でやっとのこと生きてきた人にも等しくやってきます。まるで、自分が苦労して積み上げてきた人生の宝物を奪い去って行くかのようです。

でも、そのときわたしたちは何が本当に大切なもので、何が取るに足りないものだったのかはっきりわからされます。



永遠への入り口

この世の財産も成功もそのときには役に立ちません。この世の中に希望がまったくない、と思うようになって初めてもっと大切なものがあることに気がつかされます。この世界を創造され、わたしたちにいのちの息を吹き込んでくださった神さまだけがわたしたちを永遠のいのちへ導いてくださることができます。

神さまはわたしたちが何も知らないまま、死んで滅んでしまうことをとても悲しく思っておられます。そうならないためにご自身の一人子である主イエス・キリストをわたしたちの罪のために十字架におかけになり、わたしたちの罪を赦してくださいました。主イエスがわたしたちのために死んでくださったことを、悔い改めて信じる人は人生の最期を迎えても安心していることができます。間違いなく神さまがおられる天の御国へ入れていただけるからです。

主イエスは聖書の中で次のように言われました。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。」
(ヨハネ　6･47)

「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」
(ルカ　23･43)

主イエスに従ったパウロという人は次のように言っています。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス･キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。
(ピリピ　3･20)

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト･イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。
(ローマ　8･38､39)

主イエスを心から愛したヨハネも次のように言っています。

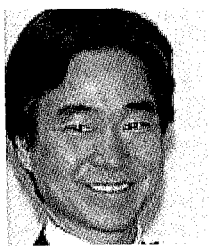
もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。(1ヨハネ　1･9)

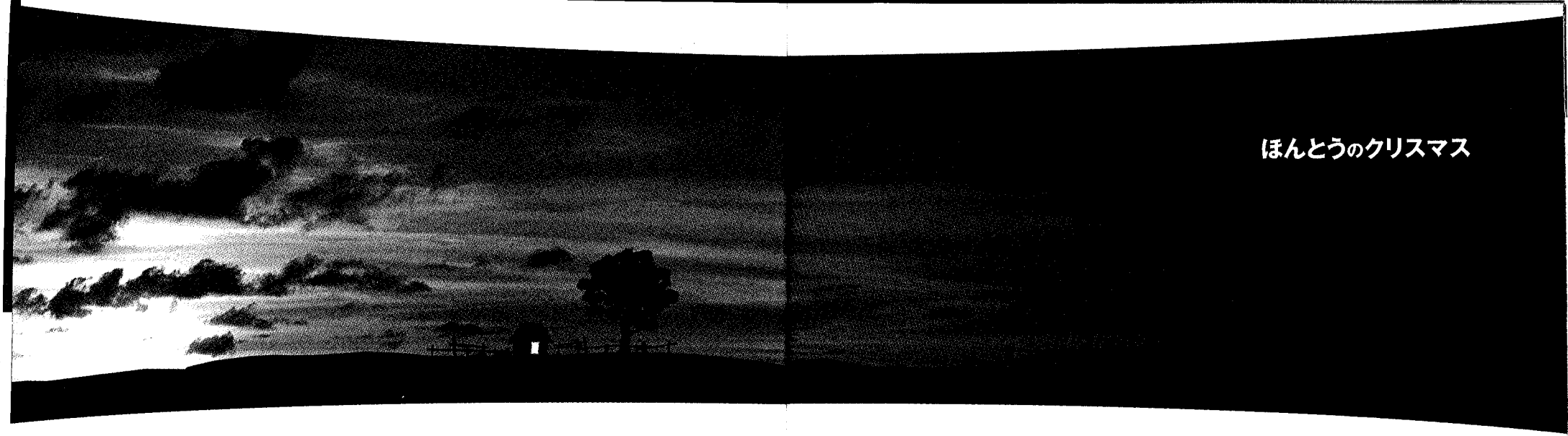
私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。
(1ヨハネ　5･13)

生きている間に死を超えた先にある確かな救いをご自分のものにしたい、と思われるのなら、どうぞ私たちと一緒に次のように祈ってください。

救い主、イエス様。
あなたのことを知らなかったわたしを愛してくださり、わたしの罪のために十字架にかかり、わたしを赦すために死んでくださったことを感謝します。
わたしはやがてこの世の人生を終わりますが、そのときあなたはわたしに永遠のいのちを与え、あなたの御国へ入らせてくださることを感謝します。
あなたのすばらしさをほめたたえます。
主イエス・キリストの名によって、
アーメン。

野口　修
青梅市立総合病院消化器科部長、
医学博士
東久留米西中、早稲田大学高等学院、
東京医科歯科大学医学部卒、
日本消化器病学会指導医・評議員
東京医科歯科大学医学部臨床講師





ほんとうのクリスマス

12月はクリスマスの月です。クリスマスと聞くと、みなさんはどんなことが頭に浮かびますか？

大きなツリー、きれいな飾りなど、町はとてもはなやかになります。そして、プレゼントを交換し、ケーキやごちそうを食べたりして「自分の好きなように楽しもう」ということが、今の時代のクリスマスの過ごし方だと思います。

でも、クリスマスのほんとうの意味と目的を、みなさんは知っていますか？クリスマスとは、主イエス様が地上にお生まれになった日、イエス様のお誕生日です。神様のひとり子であるイエス様は、約2000年前に人間として地上にお生まれになりました。私たち一人ひとりに大切なプレゼントをくださるために、お生まれになったんです。

この、クリスマスの本当の意味と目的について、聖書のみことばを見てゆきましょう。

1) イエス様の誕生

マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。
(マタイ　1･21)

彼らがそこにいる間に、マリヤは月が満ちて、男子の初子を産んだ。それで、布にくるんで、飼葉おけに寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。すると、主の使いが彼らのところに来て･･･言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」
(ルカ　2･6～12)

イエス様がお生まれになった時のようすです。イエス様は、小さな宿屋の馬小屋でお生まれになり、飼葉おけの中で眠られました。これが、地上での「はじめてのクリスマス」です。今の時代のはなやかなクリスマスとは、かなりようすが違いますね。イエス様はとてもつつましく、けれども神様のご愛と祝福の中で、静かにお生まれになりました。その目的は、『救い主として、私たちを「罪」から救うため』でした。

2)「罪」とは何でしょうか？

聖書には、私たち人間はすべて罪人である、と書かれています。

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、(ローマ　3･23)

「罪」とは何でしょうか？私たちは、法律にさからうことを「罪」と言います。「罪」という言葉からは、「悪いことをして警察につかまる」ということをまず考えるのではないでしょうか？もちろん、それは良くないことです。でも、聖書が言う「罪」とは、警察につかまることだけではありません。

人はうわべを見るが、主は心を見る。
（1サムエル　16･7）

「主」とは、父なる神様とイエス様、お二人のことです。このみことばから、「罪」は私たちの心にあることがわかります。だれでも、うそをつく、友達に意地悪をする、お父さんやお母さんの言うことを聞かない、といったことは必ずあると思います。

この、私たちのわがままな思いや行いの一つひとつが「罪」です。

そして、人間はいつか、神様から罪のさばきを受ける、と聖書には書かれています。神様は完全に正しい方なので、罪をそのままにしておくことはできません。罪人のままでは、私たちは「有罪」となり、さばきを受けることになります。

イエス様は、この「罪」から私たちを救ってくださるためにお生まれになりました。どのようにして私たちを救ってくださるのでしょうか？

3) イエス様の十字架

イエス様は言われました。

「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」
（ヨハネ　10･11）

「良い牧者」はイエス様、「羊」は私たちのことです。イエス様は、私たちを「罪」のさばきから救うために、ご自分のいのちを捨ててくださいました。

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。
（1ペテロ　2･22,24）

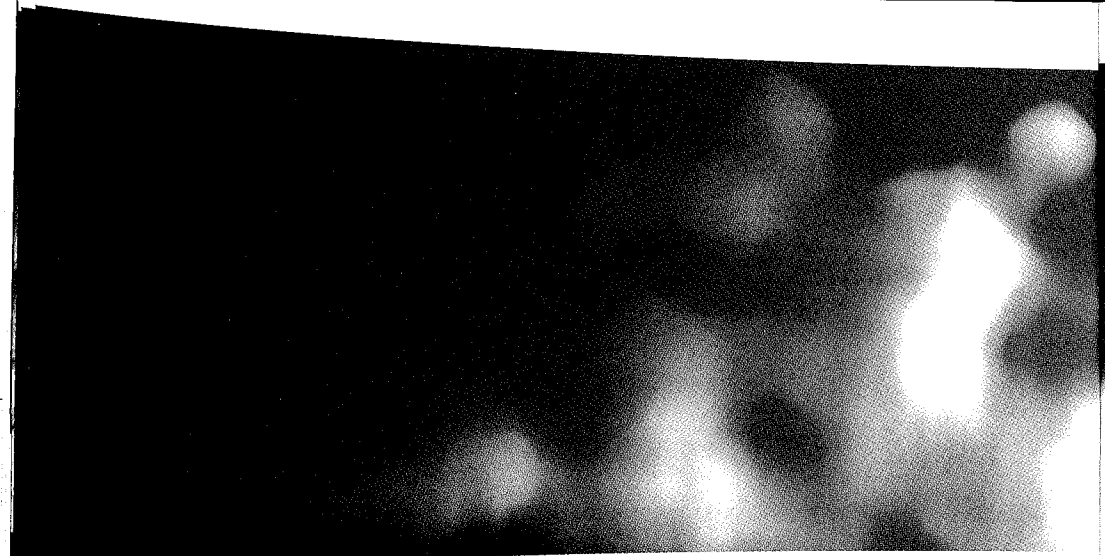
イエス様は、罪を犯しませんでした。それなのに、私たちの身がわりに罪人としてさばかれ、十字架でいのちを捨てられました。手足をくぎで刺し通され、罪のない血を流されました。さばきの時に私たちが受けるはずだった痛みと苦しみを、かわりに受けてくださいました。罪人である私たち一人ひとりを愛し、ご自分のいのちよりも大切なものと考えてくださったからです。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。（イザヤ　53･5,6）

「彼」はイエス様、「主」は父なる神様のことです。イエス様が私たちのかわりに十字架についてくださったので、私たちの罪のさばきはもう終わっています。私たちの罪は、ゆるされています。自分の罪をつぐなうために、私たちが自分の力で何かをする必要はありません。この十字架による罪のゆるしこそ、イエス様からの何よりも大切なプレゼントです。

4) 罪のゆるしをいただくために

私たちは、このプレゼントをいつでも



いただくことができます。それをいただくとき、イエス様が私たちに求めておられることが4つあります。

①イエス様を信じる
ご自分のいのちをお捨てになるほどに私たちを愛してくださっているイエス様を、私たちの救い主と信じることです。イエス様を信じる決心をしたら、そのことをイエス様にお話してください。その時、イエス様は、私たちの中に新しいいのちを与えてくださいます。

②心から「ごめんなさい」をする
私たちが毎日犯してしまう罪を正直にイエス様にお話し、心から「ごめんなさい」をすることです。そうすれば、イエス様は喜んで私たちをゆるしてくださいます。この、心から「ごめんなさい」をすることを、「悔い改める」といいます。

③「ゆるしてくれてありがとう」をする
イエス様にゆるしていただくと、私たちの心は静かなうれしさに満たされます。そのとき、すなおな気持ちでイエス様に「ゆるしてくれてありがとう」といいましょう。この、「ゆるしてくれてありがとう」をすることを、「感謝する」といいます。

④静かな心でイエス様とお話をする
「私の歩みが、イエス様に喜んでいただくものとなるように、みちびいてください」と、毎日、静かな心でイエス様にお話をしましょう。また、苦しいとき、心配なことがあるとき、どうしたらいいか分からないとき・・・どんなときにも、すなおにそのことをイエス様にお話してください。そうすれば、イエス様は私たちにもわかるように答えてくださり、また守ってくださいます。この、静かな心でイエス様とお話をすることを、「お祈りをする」といいます。

5) 主イエス様は生きておられます

キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。
(ローマ　14･9)

十字架で死なれたイエス様は、3日後によみがえられました。死んだままではなく、今も生きて働いておられます。そして、私たちに対して、いつも呼びかけておられます。

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」
(イザヤ　1･18)

みなさんの中に、まだイエス様を信じていない人はいますか？その人は、このイエス様の呼びかけにすなおに心を開いて、イエス様を自分の救い主と信じ、罪のゆるしという素晴らしいプレゼントを受け取ってほしいと思います。なぜなら、イエス様は、このプレゼントを私たちにくださるために、地上にお生まれになりました。それが、クリスマスのほんとうの意味であり、また目的であるからです。

佐山　孝治
(株)ジェイ･エム･エス勤務
弘前一中、弘前高卒、東海大学医学部中退。





キリストとともに死に、キリストとともに生きる

2004年8月21日の洗礼式でのメッセージ

キリストとともに死に、キリストとともに生きる

それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

死んでしまった者は、罪から解放されているのです。もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

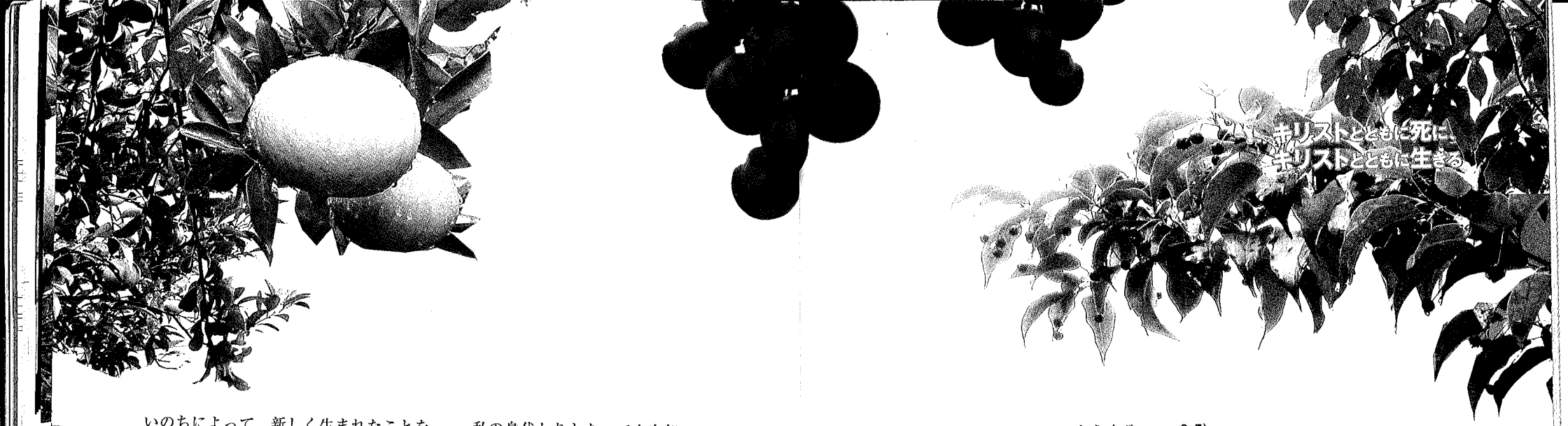
キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。

（ローマ　6・3～11）

救いにいたる信仰とは、一つの教理を信じ込むことではなく、主イエスとともに死に、主イエスとともによみがえることです。

今日、愛する５人の方々が、洗礼を受けることの意味はなんでしょうか。

それは、ひとりひとりが、主イエスの死にあずかり、主イエスのよみがえりの



キリストとともに死に、キリストとともに生きる

いのちによって、新しく生まれたことを公に宣言することです。すなわち、これから皆さんが洗礼槽の水に身を沈めるときには、主イエスとともに葬られたことを、そして水から出てこられるときには、主イエスとともによみがえられたことを象徴的に表すことになります。

私たちは、一人残らず、神の前に罪を犯した者であり、その結果として神の前に裁かれ、死ななければならない存在です。けれども、神のひとり子、罪を知らない主イエスが、私たちの身代わりに裁きをうけてくださいました。

キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。(1ペテロ　3･18)

そして、「主イエスは私の罪のために、私の身代わりとなって十字架にかけられた。」と信じるとき、聖書は、私たち一人ひとりも主イエスとともに十字架につけられたと宣言するのです。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。(ガラテヤ　2･20)

自分の過去を振り返るとき、忘れてしまいたいことや、できるならば消し去ってしまいたい過ちがあることでしょう。自分が犯してきた数多くの罪を、いかにして清算することができるのでしょうか。答えは、主イエスとともに死ぬことによってです。

自分はキリストとともに十字架につけられた、このことを知る人は、もう自分の過去について悩む必要はない。なぜなら今恥じている過去の自分は、もう主イエスとともに十字架の上で死んでしまったからです。

私たちはこう考えました。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。(2コリント　5･14)

主イエスとともに死んでしまった私たちは、これからどのように生きていけばよいのでしょうか。主イエスのよみがえりのいのちによってです。私たちは、主イエスのいのちによって新しく生まれ、主イエスのいのちによって成長していく必要があります。

「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。」(ヨハネ3･5)

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。(2コリント　5･17)

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。(1ペテロ　1･3)

私たちに必要なのは、この「生ける望み」ではないでしょうか。今日までのことは過ぎ去ったことであり、問題はこれからをどう生きるかです。主イエスが私たちのいのちとなり、力となって私たちのうちに生きてくださること、これこそ「生ける望み」であります。



もちろん、洗礼を受けたからといって、これからすべてのことが順調に行くようになるわけではありません。主はさまざまな試練を通して、私たちを清め、さらに成長させようとなさいます。いろいろな試練に遭うときには、次のみことばを覚えてください。

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。
(2コリント　4･8～11)

また、自分の罪の性質のために、たとえ洗礼を受けても罪を犯すことがあるでしょう。しかし、私たちは自分の罪を示されたとき、また新たに、その罪を十字架の上につけることを学ぶ必要があります。私たちの敵である悪魔の目的は、私たちを主の祝福から遠ざけることです。「お前は罪を犯した、お前は主の救いに、主の祝福に預かる資格はない。」という悪魔の声を、これから皆さんは何度も聞くことになります。しかし、そのとき、自分に失望して主から離れてしまうのではなく、主の十字架の血潮によって清めることのできない罪はないことを覚えましょう。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。(1ヨハネ　1･9)

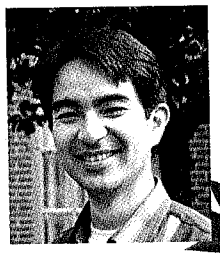
わたしたちは真実でなくとも、主は真実なお方です。十字架で流された主イエスの血潮は、私たちの罪を完全にきよめることができるのです。

2. キリストとともに死に、キリストとともに生きる

ある人の成長は非常に早く、またある人の成長は非常に遅いのです。いったいなぜでしょうか。洗礼者ヨハネは、主イエスをさして、**「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」(ヨハネ　3･30)**と語りました。このことばは、ひとりひとりの信仰の歩みにとって、非常に大切なことばです。「主イエスが盛んになる」こととは、主のいのちがわたしたちの中でいきいきとはたらいている状態です。「私は衰えなければならない」とは、自分の感情や自分の考えを大切にしないことです。わたしたちは、自分の感情や自分の考えよりも、主イエスのみことばを大切にする訓練を日々受けなければなりません。**「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」**というみことばを意識して信仰生活を送ることが、成長の秘訣です。

こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。(コロサイ　3･1～4)

羽石真二
1962年東京生まれ、宇大附中、宇都宮高、一橋大学法学部卒



モーセの十戒 8

神の聖なる戒め

ゴットホルト・ベンダー

1 それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。
2 「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、
あなたの神、主である。
3 あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
4 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。
上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中に
あるものでも、どんな形をも造ってはならない。
5 それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。
あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、
父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
6 わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、
恵みを千代にまで施すからである。
7 あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。
主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
8 安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。
9 六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
10 しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな
仕事もしてはならない。—あなたも、あなたの息子、娘、それに
あなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる
在留異国人も。—
11 それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいる
すべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は
安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。
12 あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとして
おられる地で、あなたの齢が長くなるためである。
13 殺してはならない。
14 姦淫してはならない。
15 盗んではならない。
16 あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
17 あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、
あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人の
ものを、欲しがってはならない。」　（出エジプト 20・1～17）

これから第六番目の戒め、「殺してはならない。」という箇所をごいっしょに学んでいきましょう。

「殺してはならない。」
(出エジプト 20・13)

モーセの十戒のそれぞれの戒めは、「わたしは、あなたの神、主である。」という前書きと大前提に基づいています。私たちの隣人との関係について定められた第六番目の戒めとその後に続く戒めにおいては、特にそのことを覚えていただきたいと思います。

人間ひとりひとりは、主なる神の前に立ちます。生けるまことの神のみこころによって、私たちの人生は形造られるべきです。「すべてのいのちはわたしのものであるから、あなたは殺してはならない」。私たちの神である主は、このように私たちに語っておられます。

主なる神は造り主ですから、「すべてのいのちの主」です。ただ主おひとりだけがいのちを与えることがおできになります。なぜなら、ヨハネの福音書の5章26節にあるとおり、父なる神はご自身のうちにいのちを持っておられるからです。

「それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにしてくださったからです。」　(ヨハネ 5・26)

すべてのいのちは、主なる神の持ちものです。したがって、いのちを奪うことは神の所有物を奪うことになります。創造主を敬う者は、主がお与えになったいのちを尊ばなければなりません。主なる神は人間を神ご自身の姿に似たものとして、お造りになりました。堕落した人間の中には、「神に似た姿」はほとんど見られないかもしれませんが、しかしまだ現存しているのです。

主なる神は、ただ単に人間の創造主であるだけではなく、人間のさばき主でもあります。**「罪から来る報酬は死です。」(ローマ6・23)**と、神は人間にあらかじめ、はっきりと告げておられます。裁判官である主だけが罪の罰としての死刑を執行する権利を持っておられるのです。人間そのものは、自分自身の権威で裁判官となり、人のいのちを奪う権利を持っていません。権利がないのに殺すことは殺人罪です。

主なる神は主であり、創造主であり、さばき主であり、そしてまた贖い主です。主が人間にお与えになっておられるいのちは、「恵みの時」であり、また永遠の天の御国におけるいのちへと続きます。ただ主おひとりが完全な知恵において、ひとりひとりの人間の寿命、その人に対する「恵みの時」を決定なさいます。この事実はなんと深淵なことでしょう。ですから、ひとりの人間のいのちを奪う者は、「恵みの時」を短くし、主のご意志に対して重大な責任を負うことになります。

ひとりの人間のいのちは、第六の戒めによって火の壁で囲まれています。創造主の許可なしに、人間のいのちを奪うことは許されていません。人間の背後には、いのちを守る創造主が立っておられます。したがってこの地上に住むすべての、あらゆる人間のいのちは同じように尊く、創造主のゆえに尊敬されなければなりません。

ただひとり、主なる神ご自身だけが、他の者のいのちを別の者の手に委ねることがおできになります。このようにして創造主は、たとえばノアの洪水の後にあらゆる動物のいのちを人間の手にお与えになりました。その時までは肉を食べなかった人間が、それからは動物のいのちを奪う権利を与えられました。

私たちはしたがって、動物の生死を自由にできる権利をもっているわけですが、しかし、この権利をどのように実行するかについては、主なる神に対して責任を負っています。動物をいじめ殺すことは人間の権利の乱用であり、許されていません。

野の獣、空の鳥、一地の上を動くすべてのもの―それに海の魚、これらすべてはあなたがたを恐れておののこう。わたしはこれらをあなたがたにゆだねている。生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた。　(創世記 9・2, 3)

いのちの主である神は、意識して殺人を犯した者に対して死刑をくだされました。これはノアの洪水の後に共同生活の土台として、人間に与えられた最初の律法でした。

わたしはあなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する。わたしはどんな獣にでも、それを要求する。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを要求する。人の血を流す者は、人によって、血を流される。神は人を神のかたちにお造りになったから。
(創世記 9・5, 6)



このことばは、殺すことを命令しています。人のいのちを奪う殺人者は神のみこころによって殺されるべきです。このことばは第六の戒めに反するのではなく、反対に第六の戒めを証明するものです。いのちが大切にされるため、人を殺す者は殺されるべきです。

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます。支配者を恐ろしいと思うのは、良い行ないをするときではなく、悪を行なうときです。権威を恐れたくないと思うなら、善を行ないなさい。そうすれば、支配者からほめられます。それは、彼があなたに益を与えるための、神のしもべだからです。しかし、もしあなたが悪を行なうなら、恐れなければなりません。彼は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行なう人には怒りをもって報います。

(ローマ 13・1～4)

今日の政府の最大の使命は、市民のいのちを守ることです。剣、つまり武器が与えられた目的は、外敵から国を守るため、国内における不法を防ぐため、そして市民のいのちを守るためです。政府は国境を守るために国民に呼びかけ、防衛のために武器を持たせる権利を持っています。なぜならば政府は国民のいのちを敵から守らなければならないからです。まさに第六の戒めを守るため、すなわち国民のいのちを守るために政府は武器を使います。

同じように諸国民の主である神は、ひとつの民族を滅ぼすために他の民族を使う権利をも持っておられますし、その上さらに「咎が満ちるとき」その諸民族を全滅させる権利をも持っておられます。

今までの歴史において、イスラエルの民が偶像崇拝の罪に陥ったとき、主はその罪を罰するために、他の諸民族を用いて、イスラエルを正しい道に向けられました。

主の怒りがイスラエルに向かって燃え上がり、主は彼らを略奪者の手に渡して、彼らを略奪させた。主は回りの敵の手に彼らを売り渡した。それで、彼らはもはや、敵の前に立ち向かうことができなかった。　(士師記 2・14)

主はある一つの民を滅ぼすために別の民を鉄槌としてお用いになり、それから鉄槌自体もその罪のゆえに滅ぼしてしまわれます。バビロン帝国の場合もそうでした。

万国を打った鉄槌は、どうして折られ、砕かれたのか。バビロンよ。どうして国々の恐怖となったのか。(エレミヤ50・23)

カナンの地方に住む諸民族の「咎が満ちた」とき、主なる神はイスラエルにそれらの諸民族を絶滅させる命令を出されました。したがってカナンの地に住む人々の上にくだされた恐ろしいさばきは、第六の戒め、すなわち「殺してはならない」という戒めに対するイスラエルの違反ではなく、義なる神の聖なるみこころでした。

主なる神が、諸民族をその罪のゆえに恐ろしいさばきでもって打つとき、私たちは主の聖なる義の前に沈黙せざるを得ません。

あなたの神、主は、彼らをあなたに渡し、あなたがこれを打つとき、あなたは彼らを聖絶しなければならない。彼らと何の契約も結んではならない。容赦してはならない。　(申命記 7・2)

世界史は今日もなお、神の世界支配の現われです。人間ではなく、そしてまた歴史的な人物たちでもなく、主なる神ご自身が歴史の主です。

もちろん政府が悪を罰するためではなく、まちがった動機で人を殺したり、他の国の領土や財産を奪ったりすると、その国の人々は大きな良心の呵責に苦しむようになります。十戒はただ単に個人に対してではなく、諸民族に対してもあてはまります。すべての国々の政府は、主なる神の支配に置かれており、したがって主の聖なるみこころの下に置かれています。

主なる神を恐れる者にとっては、神だけが最高の権威です。したがって政府が主なる神の戒めに逆らう場合、次のみことばが信者にあてはまります。

人に従うより、神に従うべきです。

(使徒 5・29)

人間ひとりひとりは、個人的な私生活において、社会生活において、あるいは兵役のある国はその生活において、行なったあらゆる行為に対して神の前に責任を負っています。政府に対してでも、教会に対してでもなく、ひとりひとりがおのおのの行ないに対して、神の前に責任を取らなければな

りません。しかし何と多くの人が、神の権威に従うことをせず、人の意を迎えようとしてまちがった命令に無抵抗に従ったりすることでしょうか。

今日の大きな問題は、人々が主なる神を主として認めず、力を持つ人に喜ばれようとし、上にある権力に簡単に従うことです。多くの人は、大勢の人がやっていることが正しいかどうかを判断するのではなく、「皆がしているから、自分もする」という状態に陥っています。

つまり現代で特徴的なことは、一人の人



間や一つの国、また一つの民族の生死が、それを支配し命令する政府というものの価値判断、国際間の力関係の価値判断にかかっているということです。主なる神は、いかなる国家にも、政府にも、その国民の生死に関する決定権を一度もお与えになったことはありません。人間ではなく主おひとりだけが、何が価値あるもので、何がまた価値のないものかをお決めになることができます。主の目からみれば、取るに足りない者、見下されている者こそ大切であり、貴いのです。

また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。 **(Iコリント 1・28)**

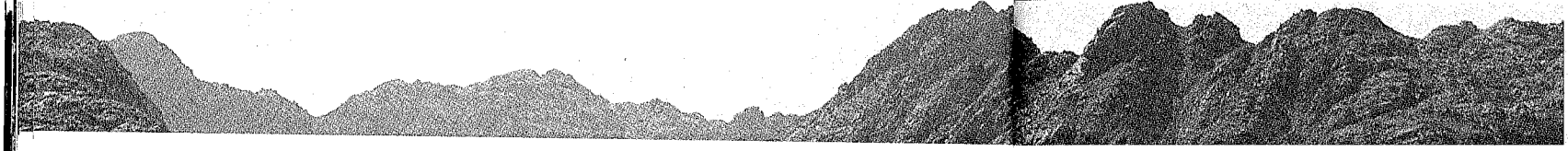
今日人類は、人間の生命を尊重することをないがしろにしがちですが、それは創造主に対する畏敬の気持ちが失われていることによります。

この罪は、ますます大きなものに膨れ上がってきています。毎日の新聞には、殺人や自殺の記事があふれています。そしてそれらが多すぎるために、殺人や自殺はもはや目立たなくなり、日常茶飯のことになってしまっています。そのため、これらのことに悩んでいる人々の叫びがほとんど伝わって来なくなってしまっています。

第六の戒めは、ただ単に国とか政府に向けられたものではありません。私たちの個人的な生活にも向けられています。多くの人々は、驚いて自問するでしょう。「この戒めははたして私に対して向けられているのだろうか。私は誰一人殺したこともなければ、殺そうと思ったこともない」と。

私たちは、日々の生活の中で、創造主の主権を完全に認めているでしょうか。現代では、産児制限や避妊をすることは、当たり前のようになっています。

日本の女性のかなりの人々は、子どもをおろした経験があるそうです。堕胎は第六番目の戒めに対する罪です。父親も母親も、創造主の前にこの罪に対しての責任があります。子どもが母親の胎内に宿ったときから、それはいのち、すなわち造り主の与えてくださったものであるということを真剣に考えてください。現在、何と多くの方々が、この罪の負い目によって苦しんでいること



でしょうか。イエス・キリストによる十字架の赦しがなければ、生涯、良心の呵責に責められることでしょう。

自殺、またそれを考えることも、第六番目の戒めに対する罪にあたります。誰一人、主の前に自分の寿命を決める権利を持ってはいません。現代人は何と簡単に自分のいのちを捨ててしまうことでしょうか。それが主による「恵みの時」を勝手に切り捨ててしまっていること、また私たちに与えられているもっとも尊い宝を投げ捨ててしまっているのだということを、人は知るべきです。

まだイエス様をご存知でない方々で、自殺以外にもはや何の逃れ道をも見出すことができない絶望しきった方に、イエス様の愛と恵みと福音を伝えることに、もっと熱心になりましょう。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」と言われた主が、すべてを新しくし、希望に満ちた生活を与えてくださるということを、一日も早く、一刻も早く、伝えなければなりません。

また、気づかずにこの戒めに対して間接的に罪を犯している人も大勢います。自分のいのちを軽率に取り扱っている人々です。この世では、生命の危険をおかして冒険をすることは、英雄視されることが多いのですが、それらはいのちを粗末にし、乱用しているゆえに、主から忌み嫌われる行為です。

猛烈な経営者は、従業員の生命を損なっていることがあります。利益追求のために従業員の力を過度に利用し、そのため彼らの日常生活の恵みの時が短縮されることに気がついていません。これもまた、主の前に、責任を負わなければならない行為です。

さて、主は、この第六の戒めを、「殺人」という行為だけでなく、「剣のように人を刺す言葉」として、また「他の人の死を願う考え」として、きびしく戒めておられます。

兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。　(Iヨハネ 3・15)

これらのみことばは、何と厳しく私たちの心の奥を照らすことでしょうか。あなたの心の中に、憎しみはないでしょうか。誰かがあなたに正しくないことをしたからといって、あなたはその人を憎んで当然だ、と思っていないでしょうか。イエス様を主として受け入れた人々にとって、憎しみは決して正当化されません。憎しみは地獄の力です。憎しみと人殺しは、主の前では同じものです。

私たちは、まったく自分と関係ないと思っていた第六の戒め、「殺してはならない。」について、改めて自分を吟味してみると、戒めに従っていないことに気がつきます。ですから私たちは頭をたれ、主の前に恥じ入って身をかがめ、主に私たちの負い目を告白せざるをえないのです。

しかし第六の戒めは、積極的な面も持っています。「あなたは殺してはならない」。私たちはいったい何をしたらいいのでしょうか。つまりそれは、「自分自身と同じように、あなたの隣人を愛しなさい」ということなのです。この戒めは、「殺してはならない」と、否定的な形で与えられていますが、それはつまり「愛しなさい」という肯定的な命令でもあります。人生の困難を軽くするため、苦しみを和らげるため、弱っている人や病人を助けるため、私たちはお互いにもっともっと助け合うべきではないでしょうか。

「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」(マルコ12・31)と主は命じておられます。しかし多くの人々は他人に対してまったく無関心、無責任で愛がありません。カインと同じように、**「私は、自分の弟の番人なのでしょうか。」(創世記4・9)**と言って平然としています。このような言葉は、「兄弟殺しの言葉」だということを忘れないようにしましょう。

主を知るようになった者は、回心を通して、永遠のいのちを持つようになったのです。それらの人々は、隣人の永遠の救い、永遠のいのちに対して大きな責任を持っているのです。私たちは隣人をイエス様のみもとに連れてきているでしょうか。あるいは反対に引き離しているでしょうか。私たちは人々のたましいに対して、大きな責任を持っているのです。次のみことばは、私たちにもあてはまります。

「人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張り人とした。あなたは、わたしの口からことばを聞くとき、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ。』と言うとき、もしあなたが彼に警告を与えず、悪者に悪の道から離れて生きのびるよ

うに語って、警告しないなら、その悪者は自分の不義のために死ぬ。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う。もしあなたが悪者に警告を与えても、彼がその悪を悔い改めず、その悪の道から立ち返らないなら、彼は自分の不義のために死ななければならない。しかしあなたは自分のいのちを救うことになる。」　（エゼキエル 3･17～19）

人間のいのちは、何と神聖なものでしょう。人間のいのちは、ただ単に神の賜物であるだけでなく、神の所有物であり、神の喜びです。主なる神は、人間のために人間を造ったのではなく、ご自身のためにお造りになりました。ですから私たちは、自分のためではなく、主なる神のために生きるべきです。

私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。　（ローマ 14･7, 8）

人間のいのちとは、何と重いものでしょうか。人間のいのちは、確かに生まれたときに始まりますが、終わりはありません。人間はみなだれでも永遠に生きます。私たちは、この地上でのいのちを、自分のために生き、また自分のために死ぬことができるかも知れません。しかし、死後生き続けることからは、決して解放されることはありません。私たちが望もうが望むまいが、永遠に生きなければなりません。問題は、私たちがいったいどこで永遠に生きるかということです。救い主としてイエス様を受け入れた者については、聖書は次のように言っています。

私たちは、いつまでも主とともにいることになります。　（Iテサロニケ 4･17）

もし私たちが、自分から主なる神の前に頭を下げることを拒んだり、自分の罪を言い表わさなかったり、主から提供された罪の赦しを拒んだりしたならば、神から永遠に離れて存在しなければなりません。神から離れた状態とは、次のみことばのとおりです。

そこで、王はしもべたちに、「あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ぎしりするのだ。」と言った。　（マタイ 22･13）

この地上における私たちの人生には大きな価値があります。この地上における人生は、永遠のための準備期間であり、神の救いを得るか、それを拒否するかの一大決心の期間です。人間はひとり残らず、この地上における人生において、自分の永遠に関して、自分自身で決定しなければなりません。

主なる神は、私たち人間に、不思議な力、自己保存の本能をお与えになりました。ですから人間は、どんな代価を払っても自分のいのちを保とうとするのです。

サタンは主に答えて言った。「皮の代わりには皮をもってします。人は自分のいのちの代わりには、すべての持ち物を与えるものです。」　（ヨブ 2･4）

永遠のいのちは、この地上のいのちよりもどれほど大切でしょうか。私たちは主とともにいつまでも生きる「永遠のいのち」を、十字架につけられ、よみがえられた救い主イエス様のみ手から受け取ることができます。イエス様がくださる最高の賜物、主とともにいつまでも生きる「永遠のいのち」と比べるなら、地上のいのちなどは小さなものです。

イエス・キリストを受け入れることによって、人間は「永遠のいのち」を持つ者となります。そして、その人の使命は、他の人もまた、イエス・キリストによって「永遠のいのち」を持つようにと、一生懸命に福音を伝えることです。他の人の救いのために、自分の全生涯を主に明け渡す者となり、人々の救いのために、自分の地上のいのちを主に捧げる者となることです。パウロのように言うことができる人は幸いです。

「私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」（使徒 20･24）

主は、知らない道を歩ませてくださいます

古田 公人



2004年3月、台湾で開かれた家庭集会の翌日、ホテルでの礼拝の後で。後列、右から2人目、古田さん、前列左端、夫人の道子さん

主はアブラム（のちのアブラハム）**に仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」**

（創世記 12・1）

アブラムは主がお告げになったとおりに出かけた。　（創世記 12・4）

23年前の1981年2月に、札幌にある農林水産省の一研究機関から東京大学へ転勤いたしました。その時の送別会の挨拶で、創世記12章の1～4節を引用し、大学では若い人たちに聖書を紹介したいと話しました。でも、心の中では、神様が私を呼び出してくださったというよりも、東京大学に呼ばれたと受け止めていました。自分の行為を正当化するために、みことばを利用したのです。この事実は心に傷となって今に残っています。

東京へ出て来てからの10年間ほどは住居に比較的近い教会へ通っていましたが、1992年5月にキリスト集会のことを知り、家内の希望が強かったので集会へ通うようになりました。その年の夏、国際福音センターでのバイブルキャンプに参加した折に、ある兄弟が私に向かって、喜びのない信仰はおかしい、と言ってくださいました。それまで教会がよくない、牧師がよくないと思っていましたが、実は自分の信仰がおかしいと指摘されたのです。目からうろこが落ちる思いがしました。今にしてわかることは、それまでの20年間の私の信仰生活は、たとえていうならば、黙示録にあるラオデキヤの教会の信徒の姿そのものでした。

「あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」　（黙示 3・16、17）

「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」

（黙示 3・19、20）

教会には十字架があり、毎週の礼拝で福音が語られています。しかし、それはガラスケースに入った宝物のようなもの、あるいはいわしの干物のようなものでした。いのちがなかったのです。聖霊が働いていなかったということが、もっと適切かも知れません。聖書のメッセージよりも人間的な価値観を優先して語られることが多かったように思います。私もまた、聖書の中で理解できるところは受け入れましたが、理解できないところは間違っているとか、ここはおかしいとか言ってはばかりませんでした。キリスト集会へ来る前の年に、教会の方々と話していたとき、天国を身近なものとして思うことができないという意味で、私には天国がわかりませんと言ったことがありました。当時、私はキリスト者学生会（KGK）の顧問教官でした。聖書研究の指導もしていましたし、教会の長老でもありました。いわば上等の酒と書いたレッテルの貼られた壜のようなもので、中に入っているものはただの水、いや腐った水であったと言ってもよいと思います。聖書はよく読んでいましたが、私の生き方とは無関係でした。ですから、たとえば、以下のみことばを読んでも、それが自分に関係しているものとして受け止めることはしませんでした。

彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者

です。彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。（ローマ 1・29～32）

もちろん、ここに書かれているようなことが悪いことだとは知っていました。だから，他人がそうすれば声を大にして非難しました。でも自分に関しては、だれでもそうなのだ、人間はみなそうなのだから、と言い聞かせていました。しかし、それは一例にすぎません。あらゆる点において、みことばよりも自分の判断を優先させていたのです。

いろんなことを知識としては知っていて、またクリスチャンとして自他共に認めていながら、実はいのちのない信仰、聖霊を内に宿していない干物の信仰、それがキリスト集会へ来る前の私の信仰生活であったと思います。まさしく、豊かになった、乏しいものは何もないといって、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。そういう状態でした。もちろん、初めて聖書を読んだ時、そして聖書に従って生きようと、それなりに決意したときには確かに聖霊が働いてくださっていたと思うのですが、いつのまにかあのラオデキヤの教会と同じようにイエス様を外に追い出していたのではないでしょうか。しかもそのことに気付くことさえない惨めな状態でした。

キリスト集会へ集うようになって、いつごろからかはっきりとはわからないのですが、徐々に主が心に語りかけてくださるようになり、目を開かせてくださいました。自分がどのようなものであるかを聖書を通して知るようになりました。とくにルカの福音書19章1～10節にあるザアカイの物語からは、ザアカイは私自身であることを知らせられました。それまでの私は、小さな狭い範囲の学問の世界で、人に遅れをとりたくないという気持ちを持ち、研究を第一とする生活をしていましたが、心は満たされず、ザアカイのように孤独でした。**「きょう、救いがこの家に来ました。」（ルカ 19・9）**とのイエス様のお言葉は、私に向かって語ってくださっていることを知りました。

もうひとつ、ヨハネの福音書5章1～15節にあるベテスダの池のほとりの病人の状況もまた私と同じであると知らせられました。彼は神様の救いを求めながらも、目にすること、その心に占めることはみな他人に関わることでした。自分を他人と比較することしかできない姿、イエス様のお言葉に従って起き上がりながらもなおユダヤ人を恐れ、ユダヤ人にすり寄ってゆくその姿、それは人の目を恐れ、しかし人にすり寄る弱い私の姿をはっきりと表わしています。そこに罪があり、自分は救いを必要とする。この事実が聖書を通して、具体的に明らかになってきました。

それまでは、突き詰めて言うならば人間の言葉としてしか理解していなかった聖書のみことばが、キリスト集会へ集うようになってからは私の心の中に滲み入ってくるようになりました。砂漠に水が浸み込むように、あるいは枯れた骨が生き返るように、悔い改める思いとともに御霊が内に注がれているのを徐々に知るようになりました。とくに、

すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。（ローマ 2・1）

というみことばは、自分を外からみた姿を客観的に知らせてくれました。また、

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。（ローマ 7・15）

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。（ローマ 7・24）

といったみことばからは、自分の内だけに隠しておきたいと思う自分のみじめな状態が、実はだれにでもあてはまるものであり、人間の力ではどうすることもできないものであることを知りました。だからこそ、

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。（ローマ 6・4）

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。（ローマ 6・6）

キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。（ローマ 6・10、11）

私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。（ローマ 7・25）

といった十字架の言葉が私を突き刺しました。

古い自分が十字架の上に主の死とともに死んだ、ということを経験的に知るようにと導かれました。悔い改めもまた自分の力ではできない、信じることも自分の力ではできない、ということは痛切に知らせられます。

十字架も十字架の言葉も、聖霊が働いてくださらなければ単なるしるしであり、また単なる言葉にすぎません。人が悔い改めに導かれ、新しいいのちが与えられるのは聖霊が働いてくださるからでしょう。ですから、聖霊が働いておられる場に出て行って、たとえどのようにつらくても、またそこが期待するものとは違っているように思えても、そこにつながり続けること

が信仰の要点であろうと思います。聖霊が働いてくださるかどうかが、教会とこの世を分けるものであり、信徒とそれ以外とを分けるものであるということは明らかです。聖霊の働いていない教会は、形は教会であっても実態は教会ではないと思います。同じように聖霊を内に宿していない信者は、形は信者でも実態は信者ではないと思います。聖霊が働いてくださらない教会の群れは、かつて所属した労働組合の群れと本質的に変わりはなかった、と思います。私のように、自分のうちに聖霊が住んでおられなかったことを知る者には、信仰を生きたものにするのも、教会を生きたものにすることも、証しのできる教会にすることも、全部聖霊の働きなのだとしか言えません。聖霊こそがすべてであると言ってよいと思います。ですから、イエス様も、

「わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒瀆も赦していただけます。しかし、聖霊に逆らう冒瀆は赦されません。また、人の子に逆らうことばを口にする者でも、赦されます。しかし、聖霊に逆らうことを言う者は、だれであっても、この世であろうと次に来る世であろうと、赦されません。」

(マタイ 12・31、32)

と仰せになったのではないでしょうか。しかし、聖霊の働いていない教会にいる人たちに、果たして、聖霊の働きの大切さがわかるのだろうかと、考えさせられてしまいます。これまで、何人かの知人に聖霊が働いている場に出る必要性を話しましたが、真剣に受け止めていただくことはできませんでした。そのことを思うと胸が痛みます。

23年前に創世記のアブラハムの旅立ちを引用して挨拶をし、それが心の傷となりました。しかし、振り返ってみると、その言葉を使って行為を正当化した自分とは別に、その言葉をもって導いていてくださった方がおいでになることがはっきりとわかります。主は、主に出会うために私を東京へ引き出してくださり、キリスト集会へと導いてくださいました。私は不誠実でしたが、その方は誠実でした。私はわがままでしたが、その方は私のわがままに耐えてくださいました。かつては想像することもできなかったことですが、両親もイエス様の前に頭を垂れるものと変えられ、イエス様の許へ招かれてゆきました。振り返ってみますと、この23年間は、

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。

(イザヤ 42・16)

のみことばのとおりに、イエス様に導かれて、知らない道、想像することさえできなかった道を歩ませていただいた年月でした。私がしたことはただ一つ、いつも聖書を読んでいた、ということだけです。すべてはイエス様がしてくださいました。

2004年3月の定年退職を前に、私の所属していた専攻が催してくださった送別会で、教官だけではなく学生さんたちをも前にして、むしろ若い人たちを意識して挨拶をいたしました。そこでは23年前と同じようにまずアブラハムをとりあげました。

アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。

(ヘブル 11・8)

私の23年間もまたそのとおりであった、どこへ行くかを知らないで出てきたのだ、ということが今はっきりとわかると申し上げました。それから、私は次のみことばを引用しました。

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。…私は…ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

(ピリピ 3・12～14)

私もこれからはパウロのように目標を目ざして一心に走りたい。残されている時間も長くはない。たった一度の人生なのだから、本当のもの、真理を求めて、それをつかまえて喜びの人生を送りたい、と決意を表明しました。



2004年5月、西軽井沢国際福音センター近くに建てられた、「よろこびの丘」の献家式で

私が強いからこのようなことを言ったのではありません。私は弱い人間です。でも、表明した決意は守りとおしたいという思いは持っています。いわば自分を励ますための決意を挨拶として語ったのです。イエス様が私を捕えてくださったことは事実です。あとは自分が、可能な限り走りたいという気持ちをこめて話しました。

この世は巧妙ですから、あの手、この手で、私を泥沼に引きずり込もうと待ち構えています。自分の立場をはっきりしなければ、私は主に従う「狭い道」を歩み続けることができません。弱い者だからこそ、気持ちを引き締めなければなりません。送別会での挨拶を心に刻んで、残された時間を主に従って、目標目ざして走り続けたいと思っています。

東京大学名誉教授。1943年京都府生まれ。桃山高、京都大学農学部卒。

主が与えて下さった恵み

藤田 匡

私がイエス様のことを初めて聞いたのは幼稚園のころでした。私は、教会の付属の幼稚園に通っており、卒園後も、高校時代までずっと日曜日はその教会の教会学校に通っておりました。大学に入り、故郷から離れて暮らすようになり、教会学校には行けなくなりましたが、夏休みの帰郷の際、教会主催のバイブルキャンプに参加し、そこで洗礼も受けました。しかし、私にとっては、イエス様が自分と何の関係があるのか、また、そもそもイエス様がおられるのかということも大変疑問でした。

大学時代、家族がキリスト集会に集うようになったため、私自身も教会から移り、集会に集うようになりました。集会では、主を実際に生きておられる方として受け取っている方々が多くおられるようだという印象を受けました。しかし、1年ほど集会に集い、集会の方々と接するうちに、私自身は主と出会っていない、ということをさらに強く感じるようになりました。それからは「主ご自身の存在を、私に分かるように示してください」と、主に直接祈るようになり、メッセージのテープも真剣に聴くようになりました。そのなかで、主が私の罪のために十字架で犠牲となってくださったこと、私はただそれを受け取るだけで救われることを教えられました。そして、それまでの罪を悔い改め、主に従っていきたい、と思うようになりました。

しかし、私が「主に従っていきます」と祈るようになってから、逆に、主に従おうと思っても実際には従っていない者である、ということを見せられるようになりました。大学院に入り、自分が同学年の仲間に比べて能力的に遠く及ばないことに気づき始めると、私はすぐに劣等感や羨望を抱くようになりました。また、グループでの共同研究の中で、自分の仕事が認められないと、不満を抑えることができませんでした。主は、私に、「与えられたもので満足しなさい。そうしてから従ってきなさい」と言っておられるかのようでした。私は、自分が与えられたもので満足することができない者である、と認めざるをえませんでした。また、私は、自分が評価されないことをとても受け入れることができない者であることに気づかされました。私は、「私はただ自分自身を大事にする者です」と主の前に告白することしかできませんでした。このように自分の中から愛のかけらも出てこないことを見させられて初めて、生活の中で、絶えず主により頼むことが大きな課題となりました。それまで、主がへりくだった柔和な方であることは私にとって無関係でしたが、その主が自分のうちに生きていて働いてくださる、ということを教えられたとき、そこにこそ希望があると思わされるようになりました。

人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。　(ヨハネ 15･5)



妻の信子さんと

2003年5月に妻信子との結婚が与えられました。結婚生活の中では、私が家庭でとる態度について考えさせられます。私が自分のことにかかりきりになって周りが見えなくなっていると、知らないうちに妻への負担が大きくなっていることに気づかされます。私どもの間にも絶えず主に立っていただくことは大変重要なことと思っております。

2004年4月から、仕事の都合で米国オクラホマ州に転勤になりました。慣れない土地に移るということで出発前は不安でしたが、集会の方々との交わりの中で、主がそこに私たちを遣わされる、ということを教えていただきました。私は、ここでも私が自分の生活を手放さず、自分でそれを思いどおりに支配しようとして、不安に陥っていることに気づかされました。主が、ご自身の望んでおられる所に私たちを置いてくださる、ということで、新しい土地で主がなしてくださることに期待するようになったとき、希望が与えられました。米国に移って半年近くになりますが、いろいろな問題、課題が起こされるたびに、家族や集会の方々のお祈りに支えられ、また、主がそのお祈りに答えて働いてくださるのを見せていただいております。

私は主の前に何もできず、ただ悔い改めるしかない者です。しかし、主が力あるお方であり、あわれみをもって私を扱ってくださいますことは、大変大きな恵みです。

それゆえ、主はあなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。主は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は。　(イザヤ 30･18)

1971年茨城県生まれ。成沢小、多賀中、水戸一高、京都大学理学部、京都大学大学院理学研究科博士課程修了後、気象庁入庁(2004年4月より米国国立シビアストーム研究所に派遣)。妻 信子さん。

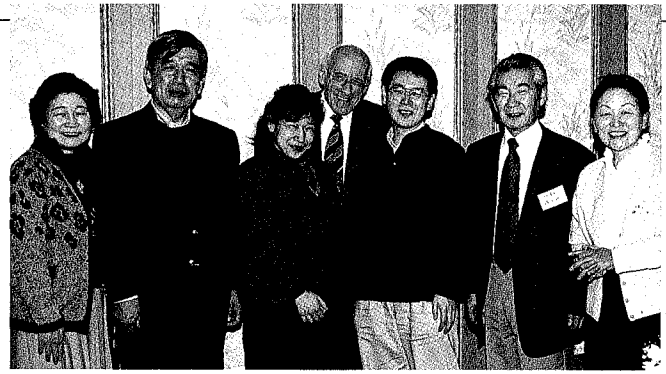
主のいのちをいただいて

藤田 信子

私が「死について」考えるようになったのは、与えられた病を通してでした。それまで大きな病気もなく健康そのものでしたのに、突然、深夜、腹部に激痛が走り、緊急入院。その日のうちに、死を覚悟することになりました。18歳の時でした。死を思ったとたんに今まで大切だと思っていた物が一瞬にして色あせ、恐怖と絶望の暗黒の闇にただ一人放り込まれました。小さい頃から教会へ行っておりましたが、聖書の知識はこの時、何の役にも立ちませんでした。「何一つ死の先には持って行けないのだろうか?どうしたらこんなにむなしい思いをしないで、死ぬことができるのだろうか?」すべてが死に飲み込まれていく恐怖の中で、一条の光が差し込むかのように、何故かイエス様のことを思い出しておりました。「この方に頼れば、こんな死に方をしないですむかもしれない。」翌日、手術が行なわれ、1,000ccの輸血をし、40針もお腹を縫っていただきました。この病をきっかけに、集会に導かれるようになりました。この病こそ、主からの大きなプレゼントでした。この病を通して、死について真剣に考えるようになり、生きておられるまことの主と個人的に出会うようになったからです。退院から2ヵ月後、両親と3人で洗礼を受けました。そしてこれからは主のために生きて行きたいと真剣に願うようになりました。

当時、どのように主に仕えるかを決めるのはいつも自分でした。私は自分の力で主に従うことができると思っていたのです。しかしそれはことごとく敗北の連続でした。大学時代、友人に色々な教派のクリスチャンがおり、誘われるまま、路傍伝道でもトラクト配りでも奉仕でも、とにかく良かれと思うことは何でもしました。熱心であればそれで良いと思っていました。少しも間違っていると思っていませんでした。しかし集会のメッセージや主にある兄弟姉妹との交わりを通して、私は「イエス様のために」と言いながら実は自分が認められたいだけで、どこまでも「自分」、「自分」のことしか考えていないこと、信仰とは全く違う歩みをしていることに気づかされました。自分は自分を頼みにしているところに問題があることにまったく無頓着でした。

その後、保育園に就職しました。思ってもいないほど、辛い日々でした。自分の中から、愛がちりほども出てこず、そんな自分を見るのもうんざりでした。私は自分の「死」を見つめた時に救いを必要としましたが、自分が日々を歩むためにも救いを必要としている者であることを知りませんでした。私の中には常に罪が生きていて、どこまでも自己中心で、自分を守ることしかできないことを日々見せつけられるのです。自分ではどうすることもできないこの罪のために、この私のために、イエス様が来てくださり犠牲となってくださったことを、苦しみを通して知りました。それは言葉に尽くせない喜びでした。主は愛そのもので、真理そのもので、温かく息づいておられる「いのち」そのものでした。主は私のためにすべてのことをすでにしてくださっていたのです。邪魔なのは自分でした。



ベックさんを中に、信子さんと匡さん。それぞれのご両親と一緒に

この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。　(ヨハネ 1･4)

7年間の勤務は、徹底的に自分に失望させられる日々であり、同時に、主により頼むことにこそ希望があることを知らされる日々でもありました。

昨年、同じ集会に集っていた主人と結婚し、その11ヵ月後に、主人の仕事で米国オクラホマ州に移りました。自分を見ると失望しかありませんが、与えられた問題や悩みを主におゆだねしますと、恵みが次々やってくるのです。私はただ、主が成してくださった恵みを受け取るばかりです。主は家族を一つとしてくださり、救いに導いてくださり、共に祈る方々を与えてくださいました。すべては主が成してくださったことです。私は悩みに振りまわされる者ですが、主人と共に毎日お祈りをしながら、日々の重荷を主におまかせしています。小さいことも大きいことも生活のすべてを主が握っておられることは、本当に感謝です。与えられた日々の問題･悩みを通して、生きておられる偉大な主を知り、まごころから主をほめたたえるばかりです。

神よ。あなたの恵みは、なんと尊いことでしょう。人の子らは御翼の陰に身を避けます。彼らはあなたの家の豊かさを心ゆくまで飲むでしょう。あなたの楽しみの流れを、あなたは彼らに飲ませなさいます。いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです。　(詩篇 36･7～9)

1972年東京都生まれ。南山小、玉川聖学院中等部･高等部、日本ルーテル神学大学社会福祉学科卒業。夫 匡さん。

永遠のいのちを生きる幸せ

重田 都代子

生まれつきからだの弱かった私が物心ついた時は、すでに第二次世界大戦が始まっておりました。そして疎開、敗戦、それに伴う価値観の激変、物資の欠乏、家庭内の波乱などの大波に翻弄され、飲み込まれそうになりながら私は成長して行きました。身のまわりが百八十度変わってしまった中で、私の心には空しさと不信感が大きく広がっておりました。人間のしたことによって、すべてが変わってしまった中で、少しも変わることなく輝いていたのは、今でも心に焼き付いている疎開していた山里の美しい自然の風景と、その営みでした。

ほどなく東京の家に帰った私は、「変わることのない真実とはいったい何なのだろうか、これから何を心のよりどころとして生きて行けばよいのか」など、大きな疑問を心に秘めながら戦後復興の時代をただ一日一日の生活を、弱いながらも懸命に生きてまいりました。

高校3年にさしかかる春、私は急性盲腸炎になりました。そしてその日のうちに入院した病院の主治医のところに、卒業間近の主人が春休みを利用して臨床実習に来ていました。退院後主治医のドクターを両方が知っていたことから、互いの家に行ったり来たりという程度のお付き合いが始まり、4年後に結婚することになりました。自分で慎重に判断し、決めたと思っていたこの結婚も、主によって導かれたものであったことを知ったのは、ずっと後、主イエス様と出会ってからでした。

結婚して9年目に私たち夫婦に神様は子どもを授けてくださいました。それまで、人生は辛いけれど生まれた以上自分でなんとか生きて行かなければならないと心に決めて、ただ自分の思いで生きて来た、まったく神様に対して不遜で身勝手な私をも神様はあわれんでくださり、20年の間だけ子どもを愛して育てるという、何にも代えがたい体験を与えてくださいました。そして20年後にご自分のもとに連れ帰ってくださったのです。最愛の御子イエス様を神様がこの地上に遣わしてくださったその深いご愛のほんの少しでも私が知ることができるようにと、私をあわれんで、愛する一人子の娘まりを地上では20年間、そして天の御国では永遠に共に生きる者として与えてくださった主のあわれみを思うとき、私の心は感謝でいっぱいになります。



神様が与えてくださった子どもらしく、娘まりはほんとうに人に愛される性質を持っていました。小さいときから快活でまわりの人に愛され、成長してからは人の心の奥深くを察し、優しく、人の話のよい聞き手であり、慰め手となり、そばにいるだけで温かさが伝わってくるような娘でした。ほんとうに私には出来過ぎた娘といつも思っておりました。まりと私はいつも心の通じる、何でも話し合える友達のようでもありました。

36歳の頃から私はいろいろなからだの不調に悩まされることになりました。とくに食事をした後内臓の苦しみがひどくなり、それを調整するためにと飲む単純な薬に対しても強い副作用が現れるようになり、症状を抑えるための薬は飲めばなお苦しくなるだけでした。何人もの専門医にもかかりましたが、検査の結果は器質的な異常が発見されないため、薬を使えないこの患者を医師はどうすることも出来ませんでした。今はその苦しさが生まれつきの消化酵素やホルモンなどの分泌不調によって起こっていることが自分でわかるようになりましたが、その当時は次々と起こるわけのわからない苦しみの中で恐れも不安も強くなり、体重も35キロまで減りました。そのためまりが大学に入学した直後、ある胃腸科病院に入院し、薬を使わないで心理的な療法を受けてみてはということになりました。けれども結果的には何事も改善しないまま2か月後家に帰りました。

少しさかのぼりますが、私ども夫婦はこの1年ほど前から、主人が25年前に離れた教会に行くようになっていました。動機は別々で、私は人生にいろいろな疑問を持っておりましたし、人には理解できないこの肉体の苦しみをわかっていただけるのは聖書の神様しかない、どうしても神様のところに行くしか解決の方法はない、という切実な思いからでした。また主人は学生さんたちから聖書を読む会の顧問になってほしいと頼まれ、また教会に行かなければ、という思いからでした。牧師さんは人間的には良い方でしたが、しばらくすると牧師さんのみことばの説き明かしが人間的な解釈のように感じられ、それな

ら自分で読んでみようと聖書を一生懸命読んでもさっぱり意味がわからず、たいへん苦しみ、悩みました。神様のみ前にへりくだることも知らず、人間の知恵で聖書を理解しようとした傲慢な私の前に、神様は厳然とみことばの戸を閉ざされたのです。

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。
(1コリント 1・21)

そのような時に入院することになったため、入院している間じゅう私は「神様、私がイエス様に出会える教会へ導いてください」と必死に祈っていました。どんどん痩せ衰えていた私は「このままもう死ぬかもしれません。でもそれはどうでもいいのです。私は死ぬ前にただイエス様に出会わせていただきたいのです。そうでなければ、なぜ私のような者がこの世に生まれたのか、その意味もわかりませんし、自分で読んでも聖書のみことばの意味はまったくわかりません。そしてまた、この世の中を探しても、どこにも見つからない真理とは何なのか、これがわからなければ生きている意味がないのです。どうか私がイエス様に直接出会えるところへお導きください」と昼も夜も祈り求めていました。するとある日、主人から教会の月報が届けられました。その月報に載っていたのは、教会でずっと苦しんでおられたあるご夫妻が吉祥寺集会のキャンプに出席され、その結果教会を去って吉祥寺集会に移られることについての喜びの証しのお手紙だったのです。このような思いがけない方法で、私のせつなる祈りにイエス様が答えてくださり、集うべき所を教えてくださった、と気づいたときの私の驚きはたとえようもありませんでした。

苦しみのうちに、私が主に呼ばわると、主は私に答えられた。 (詩篇 120・1)

私はその集会にぜひとも行きたいと思いました。人に理解されない私の病気も、この入院も、私が真剣に主を呼び求めるために必要なものとしてイエス様が備えていてくださったのです。

主の導きをはっきりと知った私は、半年間真剣に祈ったすえに、牧師さんと主人にそのことを話しました。牧師さんは「教会の籍はどうなるのですか。ベックさんがドイツに帰られたらどうするのですか」などと私を止めようとされましたが、私は籍は天にあればよいのだから、この地上で教会の籍はいらないと思いました。また主人には「行きたいなら行きなさい。でも僕は絶対に行かない」と言われました。けれども私は何としても主の導きに従いたいと思いました。そして牧師さんにはいろいろお世話になったことを感謝し、主は必ず主人をも導いてくださることを信じ祈りながら、ちょうど受洗の講習を受けているうちに、どんどんと教会から心が離れてしまった娘とともに吉祥寺集会に集わせていただくようになりました。1981年、今から23年前のことでした。

まだ私のからだの状態は苦しく、集会のある日の朝まで祈りに祈って、迎えに来てくださる方の車に乗せていただき集会に集い続けました。そして、集うごとにイエス様は私の霊の目を開いてくださいました。教会にいた時、あんなに一生懸命読んでもまったく分からなかったみことばが一つ一つ私の心の中に深く沁み込んで行きました。天の窓が開かれるとはこういうことなのかと思いながら、夢中になって私はみことばを食べました。みことばは渇いていた私の心を満たし、からだにも元気が与えられました。

吉祥寺集会にはベックさんの語られたメッセージのテープがまるで宝の山のようにたくさんありました。私は家に一人でいる時、いつもこれらのテープを聞いていました。そして吉祥寺集会に集うようになって4ヶ月目に、ベックさんの「エリシャの生活」というシリーズの中の一本のテープを聞いていた時、次のみことばが強く心に飛び込んで来ました。

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。死んでしまった者は、罪から解放されているのです。
(ローマ 6・4〜7)

からだが不調になってからは家族に迷惑のかけっぱなしであり、自分で自分を愛することもできなくなっていたこの惨(みじ)めな私をイエス様がともに十字架につけて、すでに葬ってくださったということをこのみことばによって知った瞬間、私はあっと声をたてました。イエス様はこんな惨めな私をもうすでに葬ってくださったのだ、それだけではなく、ご自分のいのちによって新しく生まれ変わった者として生きなさいと、永遠のいのちまでもすでに与えてくださったという事実をはっきりと知ったのです。そして、これまでまったく自分中心の思いで生きてきた私の罪のからだはすでに死に、罪から完全に解放していただいたということも知りました。この考えられないようなイエス様のみわざが私自身のためであった、イエス様が十字架にかかってくださるほどに私を愛してくださった、そして今も私のような者に目を留めて愛し続けてくださっているということを知った時、私の今まで引きずって来たすべての心の重荷は消え去り、穴の開いていた心はすっかりイエス様ご自身によって満たされました。これが心から求めていたイエス様との出会いの瞬間でありました。

わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。 (イザヤ 43・1)

ずっと私を呼び続けていてくださったイエス様のところにようやく私はたどり着いたのです。それからというもの、**「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」**(ヨハネ 16・33)、というみことばをいただき、この世にあっては患難があるのはあたりまえのこと、すでに死に打ち勝ってくださったイエス様が勇敢でありなさいと日々励ましてくださるこのみことばによって、与えられている肉体のトゲのあるまま私は一日一日と元気になって行きました。

私と娘が吉祥寺集会に集うようになってから半年目には、主人も吉祥寺集会こそまことの生ける教会であることを御霊によって示され、家族3人がともに吉祥寺集会に集い、霊の一致をもって、心から主に礼拝を捧げる、喜びにあふれた家族としていただくことができました。これも主の大いなる哀れみのみわざと言うほかはありませんでした。

これから娘まりのことについて証しさせていただきたいと思います。まりは高校生の頃から深く自分を見つめるようになっていました。文学が好きで本をたくさん読み、どのように生きるかについても真剣に考え始めていました。そしてその結果いろいろと悩むようにもなっていました。ですから悩む人の気持ちを理解し、助けたいという思いもだんだんと大きくなっていました。聖書もその頃から真剣に読み始めていました。そして親からの影響も強くあって、まりの医者になりたいという気持ちは固まっていったようです。まりが高校3年生になった頃、私は好きな文学を学ぶことのできる文学部に行くことを勧めましたが、最終的な進路決定の時まりは「やっぱり医学部志望と書いたの」と私に話しました。一人娘であった彼女にはいつまでも親に甘えていないで、早く自立したいという思いも強くありました。そして親元を離れ、親の勧めに従ってT大学の医学部に入ったのが吉祥寺集会に集う約半年前の1981年4月のことでした。夏休みにはキリスト者医科連盟の行事の一環として、フィリッピンでの医療奉仕団の一員に加えていただき、たいへん充実した生活を過ごしました。

二学期になって、元気に大学に戻った娘から、思いもかけず「この頃学校に行けなくなった」という電話が入りました。私たちは驚いて飛んで行き、彼女の心の慰めとなっている聖書や、賛美のある場所が必要と思い、その町の教会に行き、宣教師の方に会っていただきました。「さみしい人はたくさんいますから、いい人を紹介します」と言われ、あるアメリカ人の女子学生をお互いの慰めになるようにと紹介していただきました。もともと娘が入学してから悩んでいた大きなことがらは、当初私たちには打ち明けませんでしたが、その大学での男女の性的な乱れでした。後に打ち明けてくれたところによりますと、実習中にいつもまりに向かって、前の夜のことを大きな声で話す女子学生や、女子寮の隣室での夜な夜な起こる男女の声や物音にたいへんショックを受け、悩まされ続けたとの事でした。しかも、それらの事は氷山の一角のようでした。そのようなまりに、紹介されたその女子学生が毎晩のように、複数の男子学生を学生寮の自室に呼び入れている人であるということがすぐにわかったのです。宣教師を信頼して紹介していただいた人が、そのような乱れた生活を送っていた人だったと知った娘は、宣教師に対する不信とともに二重に深く傷つきました。彼女の苦しみに追い討ちをかけるような出来事でした。そのような事が女子学生の寮内で起こっているなどという事は20余年前の当時、親も本人も夢にも予想しておりませんでした。

その苦しみも娘は私たちに直ぐには告げず、なんとかして自分で頑張ろうとしましたが、純粋な環境で育った彼女にこのような学生たちの実態を受け入れながら勉強を続けることは、もはやむずかしく、どんどんと心が苦しみ病んで行きました。完全に鬱(うつ)状態を示し始めた彼女に危険を感じて、私たちは家に連れ帰りました。

心が病んで娘が苦しんでいるということをベックさんにお話ししますと、ベックさんはただちに娘に会いに来てくださり、長い間交わってくださいました。その後まりは集会に集うようになり、どんどんと心は解放されて行き、イエス様を心から救い主として信じ受け入れ、私たち親よりも先に一人で洗礼を受けさせていただきました。けれども、病気の状態は簡単には改善されず、大学病院で治療を続け、抗鬱剤の



まりさん(右)17才のとき、日光でご両親と

投与も受けておりましたが、やがて顔やからだに薬の副作用による真っ赤な薬疹が出てきて危険な状態になり、薬での治療の道は閉ざされました。そのような娘の苦しみの中で、私は娘に「どんなことをしてでも人間は生きて行けること、医学部を止めてもっと気楽に生きる道はいくらでもあること、まっすぐに行って突き当たったならば、右に行く道もあるし、それがだめなら、左に行くという生き方もある」ということを私の体験をもとにしてよく話しました。けれどもまじめな彼女はそのような道を選ぼうとはせずに、苦しい心でそのまま、まっすぐ進んで行こうとしました。

まだそれほど人数が多くなかった吉祥寺集会では、ベックさんをはじめ集会の皆様方が娘のために真剣に祈っていてくださいました。娘もいつも聖書を手放さず、状態の良いときには、集会に出たり、また夏の軽井沢のキャンプにも出たりして、一生懸命にイエス様に頼ろうとしました。けれども、今とは違って当時は昔ながらの抗鬱剤しかなく、それも飲めない娘の回復

ははかばかしくありませんでした。鬱病というのは脳の中の神経伝達物質の不調から起こる肉体の病気です。そしてその代表的な症状として、死にたいという思いが極めて強くなる病気です。これはちょうど風邪をひけばくしゃみや咳が出たり、腸に炎症が起これば下痢をしたりするのと同じように、その病気によって起こる、たいへん苦しい症状なのです。このような苦しい症状の伴う病気に悩まされながらも、娘は一生懸命イエス様により頼んでいました。まりの聖書の赤線の引かれたたくさんのみことばの中から一つ引用させていただきます。

しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりつかまえられました。あなたは、私をさとして導き、後には栄光のうちに受け入れてくださいましょう。天では、あなたのほかに、だれを持つことができましょう。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。　(詩篇 73・23～25)

少し良くなったとき、主治医と相談の結果、治療上の一つの手段として親元を離れ、どこか彼女を理解し受け入れてくださる家庭での生活をしてみるのがよいのではないか、ということになり、ベックさんに相談して、高松のある宣教師の方が預かってくださることになりました。その時まりはなんとか外面的にはようやく普通に生活できるようになっていましたが、病気による内面の浮き沈みに伴なう苦しみの症状が強かったのに、愚かな私たち親は、それを十分察することができませんでした。主治医もあまりゆっくりしていると症状が固定してしまうと言われ、早く学校に戻すことを一番と考えておられましたし、大学側も早くまりが学校に戻れるようにと心待ちに待ってくださっていましたけれど、私たち親はまわりから何と言われても、もっともっと主に信頼し、祈りと忍耐をもって娘を手元で見守って行くべきだったと思います。

高松に行って2ヶ月ほど経ったとき、高知のよろこびの集いに出て、たいへん喜んだ娘に、高松に帰ってから病気から来る激しい落ち込みの苦しい症状が起こり、その症状のために自らいのちを絶つという思いもよらない結果になってしまいました。20歳11ヶ月の時でした。その知らせを聞いた時、私は雷に打たれ、全身が真っ二つに引き裂かれたように感じ、机の上にうつ伏せに倒れました。これで私の人生は全部終わったとほんとうに思いました。けれどもイエス様は私を間もなく立ち上がらせてくださいました。

イエス様を信じて一生懸命まじめに生きようとし、苦しい病の症状の結果、そのような形でこの世を去った娘をイエス様があわれんでくださらないはずはないと私は確信しました。

彼(イエス様)はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、　(イザヤ 42・3)

わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。　(ヨハネ 6・37)

主治医にお電話したところ、「あんなに可愛がっていらっしゃったのに…」と絶句された後、「これはみな私の責任です」とおっしゃいました。私はすぐに「先生の責任ではありません。いのちのことは神様の御手の中にあるのですから」と答えていました。ご自分の責任をはっきり認められた先生の態度はご立派でしたが、私はこんな大きな事が誰のせいなどと軽々しく言える問題であるはずはないと思っていました。

そう思いながらも、深夜床についた私はまったく眠れず「イエス様、まりをあわれんで天国に迎え入れてくださった事を心から感謝します。けれども私はこんな大切なまりを私の判断違いから死に至らしめたあまりにも愚かな自分を決して許すことはできません。このような罪を負ったまま私はこれから生きて行くことはできません。これは全部私のせいです。病んでいる娘に対する私の愛の足りなさ、主に対する信頼の足りなさ、祈りの足りなさ、そして娘を育ててきたうえで正しいと思いながら、どんなに私は傲慢であったことでしょう」と繰り返し繰り返し、イエス様に祈るともなく申し上げていました。すると突然、

キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。　(ローマ 8・1)

というみことばが私の頭の中に閃光のように鋭く入って来ました。知っていたみことばではありましたが、とくに頼っていたみことばではありませんでした。けれどもイエス様は私の祈りともつかない言葉に対して、はっきりとみことばをもって答えてくださったのです。私は愕然としました。そして、イエス様がご自身の十字架上での死によって完全に罪を取り去ってくださり、罪に定められることのない者としてくださった私を自分自身が罪に定めていた事にはっきりと気が付きました。もはや自分に死に、主のものとなった私を罪に定めることが、まったく十字架の尊い贖いのみわざを無視した大きな罪であることに、イエス様は気付かせてくださったのです。私はもはや自分自身を裁く権利も必要もない者であることをはっきり覚え、祈りました。「イエス様、あなた様の罪の赦しがこれほど完全であることを今はっきりと教えていただき心からありがとうございます。私はもう自分を罪に定めることなく、ただイエス様に従ってまいります。どうぞあわれんでお導きください」と祈った時、私は平安につつまれて、すぐ眠りにつくことができました。

翌朝、まりの遺体にこれから会うけれど、それは地上でまりが着ていた衣のようなものであって、ほんとうのまりはすでにイエス様のみもとで、地上での苦しみから完全に解放されて憩っている事を確信して高松に向かって出発しました。高松では終始主の御霊に守られ、まりを預かってくださったご夫妻に感謝し、高松の信者の方々とともに主に感謝の祈りと賛美を捧げながら、遺体を火葬にして葬儀のために東京に戻りました。これらすべての行程は信じがたいほどの主のお守りの中で行なわれました。私たち夫婦の涙はすべ

てイエス様が拭い去ってくださっていました。

東京に帰り、すぐに吉祥寺集会所にまりのお骨を持って行きました。集会所はすでにすっかり備えられ、葬儀のために美しくお花で飾られていましたが、まだ葬儀まで時間があったので、どなたもいらっしゃいませんでした。会場に掲げられた、**「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」(ヨハネ 11・25)**のみことばによって、イエス様はまりが今生きていることをご自身のよみがえりのいのちにかけて誓ってくださっていることを深く覚え、改めて心から感謝いたしました。会場には静かな主のご臨在を感じました。みことばの軸の下に私たちはまりのお骨をそっと置き、持って来た花嫁の持つブーケのようなお花を飾りました。そして後ろを振り返ると、ベックさんが立っておられ、突然泣かれました。私はベックさんに「どうか泣かないでください」とお願いしました。ベックさんがどんなにまりを愛してくださっていたかは、すでに私たちは知っていました。前に夫人のミンヘンさんから「主人はまりの写真を机の前に、まるで自分の子どもの写真のように飾って毎日祈っています」とお聞きしていましたし、ベックさんの涙の中にいろいろな思いが込められていることもよくわかりました。でも私にとって過ぎ去った地上でのことは、もうどうでもよかったのです。まりは、だれよりもまりを愛し、まりの心の中の苦しみをすべてご存知のイエス様のみもとで完全に慰められ、もうほんとうに安全なのです。彼女を苦しめたものはすべて過ぎ去り、まりを一番愛してくださるイエス様とともに永遠に生きるのです。そしてやがて私たちも天に行き、涙も悲しみも苦しみもない、すばらしい御国で永遠に一緒になれるのです。泣く理由は何もありませんでした。

葬儀は主のご支配のもとに静かな中にも、希望と感謝につつまれて終わり、私たちは主のご愛に満たされ、集会の方々と天の御国を望み見て、心がほんとうに一つにされて散会しました。司会してくださった蘇畑卓郎さんは最後に、この葬儀で主のご栄光が現されたことを感謝してくださいました。けれどもこの葬儀は、まだイエス様を知らない私たちの親族にとって、どんなに悲しいものだったことでしょう。まりを心から愛してくれていた主人の弟、私の姉、妹、甥、姪たちが主イエス様の限りないご愛を一日も早く知って、永遠のいのちの恵みに与ることができますようにと主の前にひたすら祈る毎日です。またこの葬儀においでくださった多くの未信者の方々の上にもイエス様のお導きを心からお祈りしております。

雪の日に生まれ、雪が大好きだったまりが召された冬は、とても雪がたくさん降りました。2、3日おきに空から美しく舞い降りる雪を見ていると、イエス様の特別のお計らいのように思えて深いお慰めを感じ、感謝とともに天の御国のまりに思いを馳せる日々でした。山本孝子さんは、まりを偲んで、

「十字架の約束　天に舞う」
「まりの住む　天の御国のかおり来て」
「とこしえの望みに　まりはほほえみて」

など、数首の句をお心をこめてお詠みくださいました。私の心にも主への感謝とまりへの思いがあふれ、次のような歌となりました。

「愚かなる母抱き得ぬ病みしまりを
抱きとめられしは主の永遠の腕」
(申命記 33・27より)

「水晶のいのちの川の岸辺にて
飽かず語らんいとしきまりと」
(黙示録 22・1、2より)

「わが咎を赦し給いてまりを抱き
慰めたもう主に会うはいつ」

まりが天に召されてから半年目に、いつもイエス様をたくさんの方に伝えたいと願っていたまりと志を一つにして家庭集会をしたい、と主人が突然言い始め、それから我が家で毎月主人がみことばを取り次ぐ形で家庭集会が始りました。主人の両親と私の母も毎回集ってくれました。そしてまりが天に召されて半年目に私の母が、一年目に主人の母がイエス様を救い主として信じ受け入れ、ベックさんによって洗礼を受けさせていただきました。大病後、家にこもっていた私の父も学生時代に蒔かれていた福音の種が実り、いろいろな不安と苦しみの中で心から罪を悔い改め、「神様助けてください」と大声で涙とともに主を呼び求め、み救いに与からせていただきました。長年教会に通っていたにもかかわらず霊の目が開かれていなかった主人の父も、病が与えられ入院中に初めてみことばを神様が直接自分に語られたものとして心に受け入れることができ、日々みことばを深く味わい、主に感謝を捧げ、御霊に満たされながら天の御国に召されました。すべてはイエス様の大いなるあわれみのみわざにほかなりませんでした。



結婚50周年を記念して、夫 定義さんと国際福音センターで

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。
(ローマ 10・13)

我が家での家庭集会でイエス様は次々とすばらしい救いのみわざを見せてくださり、私たち夫婦にさらに喜びと力を与えてくださいました。その間にも各地に集会が増し加えられ、主人もいろいろな所へみことばをお届けしに行くご用が与えられ、私もいっしょに行き、そこでも多くの主のご栄光を拝させていただきました。

イエス様に出会ってからの私の人生は、このように空しいものからまったく充実したものへと変えられたのです。私は願い求めてきた生きる意味とはイエス様とともに生きることであるとはっきり知り、真理とは

イエス様ご自身であることを知り、イエス様のみこころによって私は生かされていることを知るようになりました。イエス様に従って喜んで自分の十字架（私の場合は肉体のとげですが）を負って生きる人生は、ほんとうに満たされたものとなりました。私が必死になって求めたものはすべて与えられたのです。まことにすべては**「求めなさい。そうすれば与えられます」（マタイ 7・7）**という短いけれど真実そのもののみことばのとおりでした。

また、まりの昇天3年目に、祈って「私たちの国籍は天にあります」の本を主人が出させていただきました。もう最初の出版から18年にもなりますが、数回版を重ね、今だにクリスチャン書店に置かれております。どこかで主が今もこの本を用いていてくださると思うと、まりがたくさんの方々にイエス様をお伝えしたいと心から願っていたことを、このような形で実現してくださったイエス様のご愛と、愚かな足りない親であった私たちへの主の慰めのみこころを深く感じ、ただただ感謝するのみです。

まりが召されてちょうど21年の月日が過ぎました。時々寂しくはあっても悲しんだ日は一日もありませんでした。

わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。
（イザヤ 41・10）

このみことばのお約束は、私たちのような愚かな者の上にも完全に成就されたことをこの年月を振り返って証ししないではおられません。御国にいるまりを想うとき、私たちの足もみ国を目指して元気が与えられ、いつもイエス様のみわざが「主は生きておられる」ことを明らかに示してくださり、イエス様のどんな時にも変わることのないみことばと、限りないご愛に満たされて私は今本当に幸せです。

間もなくイエス様は私たち信じる者を迎えに来てくださいます。その徴候は世界中に満ちています。そして私たちは必ず起こる地球規模の大患難の前に、イエス様によって引き上げられ、先に召された愛する者たちとの、もう決して別れることのない再会が待っています。その時、先に天に召された者の肉体も、その時まだ地上にいる私たちの肉体も、イエス様と同じ、もう決して朽ちることのないよみがえりのからだに変えていただけるのです。なんという幸せなことでしょうか。その日を待ちわびながら、心からの感謝と賛美をイエス様にお捧げして、まりも私も大好きなみことばをもってこの証しを終わらせていただきたいと思います。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。　（ローマ 8・38、39）

1933年東京都生まれ、岐阜県八百津小、成城学園中、成城学園高卒、夫 定義さん。

ドイツ勤務で体験した主の守りと導き

和田 宗勝

「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」　（創世記 12・1）



2001年7月、ドイツ勤務の辞令が出て渡独しました。6月に休暇をいただいてドイツのよろこびの集いに参加し、帰国して出勤した初日に辞令を受けたのです。そのとき私は「どうして今、私が？」という疑問にとらわれましたが、上記のみことばに励まされて赴任を決意することができました。

聖書の創世記に書かれているこのみことばは、75歳になったアブラム（のちのアブラハム）に神が告げられた命令です。私だったら多分、「なぜ、もっと若いときに故郷を出るよう命じられなかったのか？」とつぶやいたことでしょう。しかし、アブラムは違いました。すなおに命令に従い、その結果、その後の人生は豊かに祝福されました。そして、私もアブラムにならって会社の命令に従おうと思わされるようになりました。「社の辞令の背後にも神様のご支配があり、すなおに従うとき、神は会社の辞令を超えて私の人生をご支配くださる」と確信できたのです。

現地では管理職の仕事が待っていました。今まで管理される側にいた者が、管理する立場になって、一支店の労務、営業、経理を受け持つことになったのでした。一年目は、生活に慣れることと、待ったなしで迫って来る現実との、まさに闘いの連続でした。生活習慣や文化の違いに戸惑

いながら、業務を遂行し、会社に収益をもたらすこと、そのためにドイツの商習慣になじむ…。一人暮らしはおろか、海外に住んだこともない身にとって、ほんとうにたいへんな日々でした。

私は幼い頃、両親を通じてキリスト集会に導かれ、その幼さゆえにすなおにイエス様を受け入れ、1987年12月に洗礼を受けました。12歳のときでした。でも、心からイエス様に従いたいと決心したのは中学、高校の青春時代、若者なら必ずぶつかる様々な問題——進路決定や友人の恋愛問題、特に罪の問題を通してでした。当時の私は、自分の罪を正直に主に告白する、ということの本当の意味を知らない者でした。また、罪を認めたくないという思いがひそんでいました。そのような私の心にある日、次のみことばが直接、射し込まれたのです。1991年8月24日のことでした。この日付は今も聖書のその箇所に記入してあります。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。…私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。…私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。

（ローマ 7・15、19、24、25）

それは自分自身の罪の性質をイエス様が、傷口の膿を出すように明らかに示してくださった瞬間でした。そのような汚い存在の私を、イエス様はご存知でありながら愛してくださり、私の罪を清算し赦してくださるために十字架で死んでくださったこと、ご自身のいのちを捨てられるご計画をはるか昔から立てていてくださったことを、目の前で知らされました。今まで何度も読んでいた箇所ですが、私の心の膿を洗い流すように入ってきたのは、初めてです。私の罪の問題をイエス様が解決してくださったことを知った、まさに"終戦記念日"でした。私のために祈ってくださった両親やキリスト集会の方々にも、感謝の気持ちでいっぱいです。

ドイツでの私は、大きな事故や病気にかかることもなく、主の守りの中で過ごしています。日々の生活や仕事を通して、主が些細なことにも介入してくださる喜びを体験することができました。

まことに、あなたのさとしは私の喜び、私の相談相手です。（詩篇 119・24）

この詩篇119篇の作者は、いつも「全知全能の神」を相談相手にして、喜びをいただいていましたが、ドイツでの勤務を通じて、この作者の心境により近くなったことを思わされ、感謝しています。

ドイツに来てからも、ニュースで知らされる様々な事件の影響を身近に感じながら「なぜ私が海外で、それもドイツで生活するのか」と考えることがあります。しかし、単に会社が私をドイツに赴任させたためではない、ということは、はっきりしました。会社の同僚や部下の人たちの希望のない、喜びのない、何を目的にして生きているのかわからない状況を知り、「自分は何をしたらいいのでしょうか、イエス様教えてください！」と祈ったとき、イエス様を紹介する時と場が与えられました。

最近、読んだハドソン・テーラー（英国の宣教師）の著書で、次のような文章が心に響きました。彼が1853年、21歳で中国へ渡った後に書いたものです。

主は私たちに何と教えておられるのか。もし百匹の羊のうち、一匹が迷い出たとしたら、九十九匹の羊を残して、その一匹を捜し求めるべきではないのか。ただしこの場合、比率はほぼ逆であり、私たちは一匹の羊とともに故郷にとどまり、滅びゆく九十九匹には注意を払わないでいる。クリスチャンの兄弟たちよ、我らの偉大なキャプテンであり指導者である方の絶対的命令「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」を考えよ。

主は私をここに送り、地上にとどまる私の時を定め、ご自身のためにすべての働きをするようにと、私を置かれた。主は十分な恵みに満たしてくださる。仕事をする恵み、苦しみを受ける恵みに。休むための恵みではなく。休息は天にある。

私も微力ながら、イエス様に属する者として地上での生活が終わるその日まで、全力を尽くして皆様とともに祈り、走り続けたい、と願っています。

1975年愛媛県松山市生まれ。神奈川県横浜市立瀬ヶ崎小学校、六浦中学校、横浜立野高校、神奈川大学法学部卒。1998年西日本鉄道株式会社航空貨物事業部入社。現在、ドイツ・ミュンヘン支店駐在。父 芳明さん、母 ヒロ子さん。



来日したドイツの姉妹の証しを通訳した時に、国際福音センターで

2005年 よろこびの大会スケジュール

1月	31(金)～1/2(日)	御代田
	15(土)～16(日)	熊本
	29(土)～30(日)	沖縄
2月	5(土)～ 6(日)	神戸
	19(土)～20(日)	名古屋
	26(土)～27(日)	仙台
3月	5(土)～ 6(日)	大洗
	19(土)～20(日)	別府
	24(木)～29(火)	バンクーバー
4月	2(土)～ 3(日)	大阪
	8(金)～10(日)	御代田
	23(土)～24(日)	高知
5月	3(火)～ 5(木)	御代田
	7(土)～ 8(日)	札幌
	14(土)～15(日)	北陸
	25(水)～6/1(水)	ミヘルスベルク
6月	3(金)～10(金)	ミヘルスベルク
7月	9(土)～10(日)	広島
	15(金)～17(日)	御代田
	22(金)～24(日)	御代田
	29(金)～31(日)	御代田
8月	5(金)～ 7(日)	御代田
	12(金)～14(日)	御代田
	19(金)～21(日)	御代田
9月	1(木)～ 6(火)	ロサンゼルス
	10(土)～11(日)	盛岡
	23(金)～25(日)	御代田
10月	11(火)～18(火)	フィリンゲン
	19(水)～27(木)	フィリンゲン
11月	6(日)	メサイアコンサート
	12(土)～13(日)	沖縄
	18(金)～20(日)	御代田

Information Box
[インフォメーション・ボックス]

夏の御代田キャンプで59人が受洗

2004年夏の「御代田よろこびの集い」では、合わせて59人の方々が洗礼を受けました。その際、病身のベックさんに代わって洗礼を授ける役目を務めた羽石真二さんの感想――。「ベックさんはこれまで軽々と洗礼槽の水の中で仰向けになった方々を起こしていらっしゃいましたが、実際にやってみますと結構力のいる仕事で、腰にかかる負担も相当なものでした。59人もの方が受洗されたことに、『恵みの時、救いの日』が終わろうとするこの時、主がご自分の子どもを急いでみもとに集めようとされていることを強く感じます。パウロは、『私はいつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、と最善を尽くしています。』(使徒24・16)と証ししています。自分の主に対する姿勢を正していかなければ、『父と御子と聖霊との御名によって』洗礼を授けることは、神と受洗する方々に対して罪を犯すことだと示されています」







「倉庫の2階や森の中で日曜礼拝」
―ヨーロッパよろこびの集いで、ロシア人姉妹が証し―

ドイツ・フィリンゲンで開かれた9月のヨーロッパよろこびの集いに、2人のロシヤ人姉妹が参加しました。姉のリリー・ナプリエンコさん(写真中央)と妹のジェーニャ・ナプリエンコさん(写真右)です。ロシヤでは、聖書だけに基づく信仰を保つため、カトリックに似たロシヤ正教に属さない、いわば非公認の集会に集っている人たちがいます。2人も、モスクワにあるそのような集会の責任者の娘さんで、ジェーニャさんは「自分たちは集会所を持っていません。会社の倉庫の2階を借りたり、ときには森の中で日曜礼拝をしていますが、御霊が働いてくださることによる喜びを体験しています」と、実情を話してくださいました。リリーさんも「かつて父が聖書のメッセージを述べたために投獄されたことがあって、私は信仰を証しすることをためらっていました。しかし、箴言3章5、6節のみことばに励まされて洗礼を受けました。私に必要だったのは主に拠り頼むことでした。そうすれば主は責任を取ってくださいます」と証しされ、さらに「20歳の時、ドイツの友人がくれた英語版『実を結ぶ命』(ベックさん編著)を読んで、主に対する思いが強められました。そのときはベックさんに会えるとは思ってもいませんでした」と語りました。

海を越えて広がる電話集会

北米では日曜の午前、各地に在住するキリスト集会の方々が電話回線で一つに結び合い、礼拝を持っています。その「電話礼拝」が2004年10月から装いを新たにしました。日本からも毎週、集会のメッセンジャー(みことばの取り次ぎをする人)が参加して、電話で聖書のメッセージを語るようになったのです。と同時に、「電話礼拝」のネットワークがヨーロッパへ広がり、初回の10月4日にはパリの吉田信夫さん、ドイツ・カールスルーエの藤井奈生子さん、ミュンヘンの和田宗勝さん、ザルツブルクのデイビッド・ツァオさん、モスクワの棚村秀樹さんらが参加しました。この日、メッセンジャーを務めた青柳惇さんは「米国で礼拝が始まる時刻は日本では月曜の午前1時。深夜、見えない方々に向かってお話をすることに最初は違和感をおぼえましたが、そのうちに皆さんと同じ会堂にいるような一体感を持ちました」と初体験の感想を語っていました。

モスクワで8月から家庭礼拝

2004年8月からモスクワ駐在の棚村秀樹さん宅で、家庭礼拝が持たれるようになりました。棚村さん夫妻のほか、小沢浩さん、祐子さんの家族、岡田宏一さんの大人5人、子ども3人という小さな集い(9月末現在)ですが、礼拝の後、日本から送られてくる録音テープで聖書のメッセージを聴き、子どものための日曜学校も行なっています。
きっかけは同年6月24～29日に開かれたモスクワ・ミニキャンプ(小規模のよろこびの集い)でした。「小沢さんは今年4月にモスクワに赴任されたばかりで、それまでは教会に集っていました。3月の大洗よろこびの集いに参加して、モスクワ・ミニキャンプと私たちのことを知り『主の導きに震える思い』で赴任したそうです。キャンプには参加しましたが家庭礼拝には来られていない北浦良子さん、石井理恵さん、今泉美代子さん、岡田さんの奥さんの聡美さん、それから『都合がつけば参加したかった』と言われた槙圭(まき・けい)さん、真砂都(まなご・みやこ)さん、辻本久美子さん、桜井理美さん、大野美由紀さん、井上さゆりさん。これらの方々がイエス様の救いに導かれますよう、また家庭礼拝に出てこられますよう、お祈りください」と棚村さんは言っています。棚村さんは2003年4月に赴任しましたが、そのマンションには70世帯もの日本人駐在員家族が住んでいます。
連絡先はC－1605 Park Place Moscow, Leninsky Prospect 113, Moscow 117198, Russia (電話7-095-956-5483)






ロサンゼルス よろこびの集い

ヨーロッパよろこびの集いに続いて9月16日、米国ロサンゼルスで同じ集いが開かれました。参加者は日本と北米からほぼ同数の合わせて約100人。ドイツから帰国したばかりのベックさんは、病気のこともあって不参加でしたが、皆さんの自覚とまとまりによって、礼拝、福音集会、親密な語り合いなどに、例年と変わらぬ霊に満たされた、充実した時を持つことができました。会場のホテル「ヒルトン・コスタメサ」は、すぐ前に日本人向けのスーパーストアがあり、7月18日に西軽井沢国際福音センターで結婚式を挙げたばかりの米国在住の渡辺周作さん、真希さん夫妻の新居も近くにありました。この新婚カップルは「集いの雑用に尽力してくださり、大助かりだった」(小池正悟さん)「喜んでいる姿は、参加者の中でひときわ輝いていた」(柿沼義一さん)そうです。





天候に恵まれた 2004年 ヨーロッパよろこびの集い




2004年のヨーロッパよろこびの集いはA(6月8日～15日、ミヘルスベルグ)、B(6月16日～23日、ミヘルスベルグ)、C(9月1日～9日、フィリンゲン)の3グループに分かれて行なわれました。参加者はそれぞれ140人、140人、150人。日本以外にドイツ、フランス、オーストリア、アメリカなどから駆けつけた方々もいました。

今年は天候に恵まれ、観光プランはすべて予定どおりに行なわれました。Aグループは古都ローテンブルクを訪ね、ドイツ最高峰のツークシュピッツェでアルプスを一望し、Bグループは由緒ある学術都市ハイデルベルクの散策とネッカー川の船による遊覧、そしてボーデン湖への遠足、Cグループはパノラマ眺望のすばらしいスイス・シーニゲプラッテ、黒い森のティティ湖、世界遺産のフランス・ストラスブール市を訪れました。

これらの観光に加えて、たくさんの聖書のメッセージ、イエス様からいただいた恵みなどを語る「証し」、多くの方々との親密な交流、清楚な宿泊施設、心のこもったシュベスター(主にある姉妹)さんたちのおもてなし、ゆったりしたスケジュール——文字どおり「よろこび」の日々でした。このようにヨーロッパよろこびの集いは、内容の豊かさ、くつろげる雰囲気が格別です。このため、まだ信仰をもっていない親族や友人を誘って参加する人が少なくありません。霊の満たしを得るためだけではなく、イエス様を紹介するためにも大いに用いられてきました。

2005年には5月と6月に1回ずつ、10月に2回、合わせて4回のヨーロッパよろこびの大会が予定されています。(「よろこびの集い」は2005年から「よろこびの大会」と名称変更されます。)

民族を超えて 「主は一つ」と賛美

——モスクワ・ミニキャンプ——



ロシアのモスクワで初の小さな喜びの集い(ミニ・キャンプ)が2004年6月24～29日に開かれました。参加者はドイツから駆けつけたベックさんのご家族を含めて日本から28人と、モスクワ在住の日本人10人(大人7人、子ども3人)です。

会場は、現地駐在の棚村秀樹さんが住むマンションが充てられ、聖書のメッセージや信者の「証し」がたくさん語られましたが、集いのハイライトはロシア人信者たちとの合同日曜礼拝でした。この信者グループは、カトリックに似たロシア正教の信仰に飽き足らず、聖書に基づく信仰を保っている人たちです。専用の建物がなく、礼拝や祈り会は、個人の家や図書館、公民館など、その時に借りられる場所で行なっています。ロシア当局に「登録した教会」ではないため、規制や圧迫を受けることもあります。

合同礼拝は6月27日、ある会社の倉庫を借りて行なわれました。このときベックさんは数十年ぶりにドイツ人の旧友と再会し、そのことで急遽、ベックさんにメッセージの役が回り、ベックさんは日本で体験された主の御業、三女リンデさんの召天、ご自身の病気のことなどを語られました。日本の即席合唱団による「日々の歌」の賛美も、飛び入りで行なわれました。

ロシアの方々は、遠い日本から同じ信仰を持つ多くの人が来たことを大変喜んでくださり、民族を超えて「主は一つである」ことを賛美した礼拝となりました。



こちら広島集会で～す from HIROSHIMA

皆さまこんにちは。広島集会の紹介をさせていただきます。

私たちは現在、東宇品神田会館という市内の公共施設を借りて礼拝と福音集会を持っています。参加者はざっと30人。礼拝前に15分ほどの短い時間、男女に分かれて祈り会を持つようにしていますが、これは礼拝に向けて心を整えることにもなっています。

集会が誕生したのは1985年。吉祥寺キリスト集会に集っていた平正明さんのご家族が、４月に転勤で広島に来られ、ベックさんの勧めで自宅で日曜礼拝をするようになったのが始まりです。当初は平さん夫妻と、別の集会に集っていた田中正子さんの３人だけの小さな群れでした。その後、別の集会からは数人の方が、「喜びがない」などの理由で移って来ました。

中国地方の中核都市である広島は、会社や官公庁の支店・支所が多く、転勤で出入りする人が少なくありません。その影響は集会にも及びます。平さんも３年で東京に戻ることになり、礼拝場所は檜垣烈さんのお宅に移りました。その後も、転勤などに伴なって礼拝場所が変わり、これからどうなっていくのだろうか、と思い煩ったこともあります。しかし不思議なことに、そのたびに、他県の集会に集っていた方が転勤して来られたり、新しい場所が備えられたりしました。主はいつも必要を満たしてくださった、と感謝して言うことができます。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。(伝道者　3･11)

こうした経過をたどって1992年、今の公共施設が与えられました。当時、集っていた人数は15人ほどでしたから、会場は広すぎる感じもしました。でも、これを境に、集う人数は着実に増えてきました。ときどきお見えになる方を含めると、40人を超えるのではないかと思います。

あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。(詩篇　81･10)

私たちは何もわからない者、弱い者の集まりです。20年近い歩みの中では、ときにさざ波が立つこともありました。でも今は一致が保たれ、喜びに満たされた集いが持たれています。主は確かに生きておられ、わたしたちを導いてくださっている、と実感しています。これからも主の導きを求め、御霊の一致を祈りながら歩んでゆきたいと思います。

神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。(1コリント　1･27)

広島集会では午前10時30分からの日曜礼拝のほか、第2、第4の土曜日午後7時30分から家庭集会を開いています。広島に来られた際はお立ち寄りください。家庭集会（3ヶ所）の連絡先は以下のとおりです。

児玉　尚志
広島市東区牛田東４－３－14
Tel.(082)224-5851

田中　正子
広島市中区橋本町４－23
Tel.(082)221-3180

渡部　弥寿志
呉市瀬戸見町 12－8
Tel.(0823)31-3441

（渡部　弥寿志）



4/10　山本 京亮・朋子

7/18
渡辺 周作・真希



7/19
上村 匡哉・浩子



Wedding 結婚式



4/11
尾崎 純・真理



5/1
江藤 尚広・絵里



10/11
山田 智弘・久美

7/31
David Wallace・恵子
デイヴィト・ウォーラス





8/15　大橋 一・理英



8/21
鈴木 快典・環

わたしは あなたがたのために立てている計画を
よく知っているからだ。── 主の御告げ。──
それは わざわいではなくて、平安を与える計画であり、
あなたがたに 将来と希望を与えるためのものだ。(エレミヤ書 29・11)



9/25　長沢 昌周・真奈



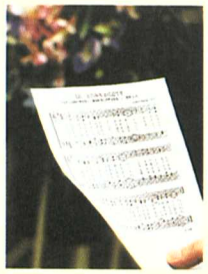
10/9　髙橋 友・道子



10/3
田島 光浩・光枝

結婚式と葬儀のご報告

神は、実に、そのひとり子を
お与えになったほどに、世を愛された。
それは 御子を信じる者が、
ひとりとして滅びることなく、
永遠のいのちを持つためである。
(ヨハネ 3・16)











2004年
4/05　森島 清子
4/20　江藤 ハツノ
4/20　宮西 清士
4/23　小川 峰弘
4/24　柿沢 次男
5/04　井上 さち子
6/04　井上 祐二郎
6/20　久枝 さだ
6/23　杉山 澄







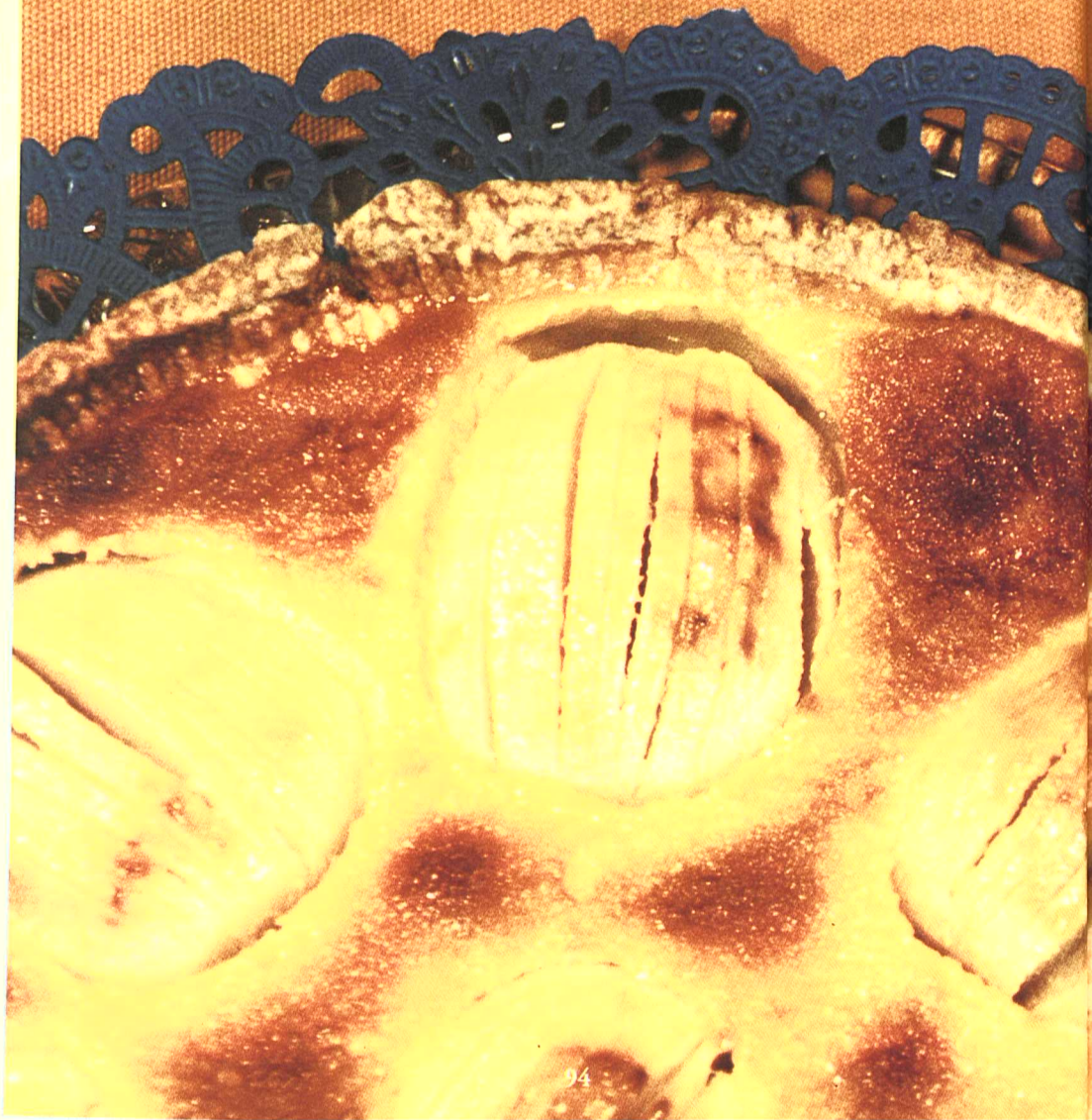
7/04　渡部 初美
7/09　一瀬 悦子
7/23　志津野 孝子
7/26　橘井 正弘
8/02　須貝 秀枝
8/05　中澤 憲一
8/16　貫田 淳子
8/17　古田 又次
8/26　吉田 寿賀子
8/30　上田 雅彦
9/01　勝連 正一
9/25　山本 馬三郎

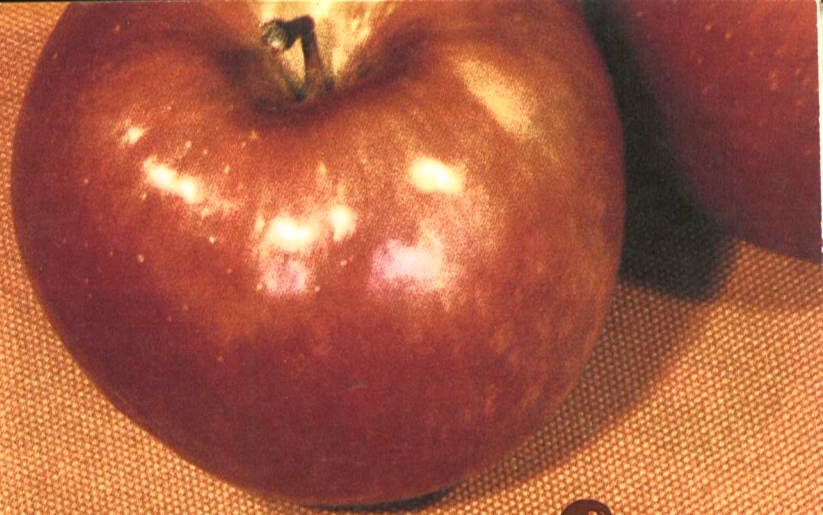


Funeral 葬儀

Elsässer Apfelkuchen

アルザス地方の
アプフェル クーヘン







ビッキーのケーキづくり



材料

《生クリーム以外は すべて常温にしておく》

台生地
- 小麦粉　120ｇ
- バター（有塩で良い）60ｇ
- 卵　1個
- 砂糖　30ｇ

- りんご　約400ｇ
- レモン汁　大さじ1

りんごは酸味のあるものが適していますが
そのまま食べるにはやわらかくなり過ぎた
りんごを使って作ることもあります。
その場合は、作り方 **12.** の焼きを省略しても
りんごがやわらかく仕上がります。

卵のクリーム
- 卵　2個
- 砂糖　80g
- 生クリーム　100cc

作り方



《台生地を作る》こねパイ
小麦粉はふるっておく

1. ふるった粉を 台の上に
こんもりと置き
中央をくぼませ
卵、砂糖、バターをのせる。



2. スプーン等で
粉をくずしながら
切りまぜていく



3. バターが細かくなって
粉によく混ざったら
手早く一つにまとめる

ポイント
さっくりとおいしく
仕上げるには
バターが溶ける前に
手早くまとめる



4. ラップをして冷蔵庫で
30分～１時間
休ませる

この状態で何日間か
冷蔵庫で保存しておく
ことができます

道具

平らな台：ここでは人工大理石の板を使用しているが
テーブル、ベニヤ板、クッキングマットなどでも良い
また、作り方 **1.**～**3.** はボールの中でも作業できる
型：21cmの丸型
その他：めん棒　泡立て器　パイカッター



★
クリスマスに
飾る「ツリー」は
ドイツで始まったと
言われています。
永遠の命を象徴する常緑樹に
「ろうそく」や「りんご」を飾り
イエス様のご降誕を祝いました
今もそのようにされる方が
いるそうです。
あの丸い玉飾りのもとは
「りんご」だったんですね。



《型に生地を敷く》
焼き型にバターを塗っておく

5. うすく打ち粉をした
台の上で
生地をめん棒でのばす



6. 焼き型よりひとまわり
大きくなったら
生地に粉をふり
２つ折りか
4つ折りにたたむ



7. 生地を焼き型の上に
のせて広げる



8. 型の底と側面に敷き詰め
縁もきれいに
手で押さえる



9. 縁をパイカッターや
ナイフ等で まっすぐ
切りそろえる



10. フォーク等で
生地に穴をあけ
ラップをして
冷蔵庫に入れておく



《りんごを並べて焼く》
オーブンを180℃にあたためる

11. りんごの皮と芯をとり
４～6等分にする
縦に切れ目を８本くらい入れ、
レモン汁をかける

ポイント
包丁の柄に近い部分を使い
向こうへ押すように切る



12. 台生地の上に
りんごをきれいに並べる
180℃のオーブンで5分位焼き
冷ましておく

ポイント
生地が少し
色付く程度で良い





《卵クリームを入れて焼く》

13. 卵と砂糖を泡立て器でまぜる
白っぽくなったら
生生クリームを加えてまぜる



14. クリームを
りんごの上からかけ
型に流し入れる



15. 180℃のオーブンで
40分くらい焼く

ポイント
型をかたむけても
クリームが流れ出なければ
焼き上がり

型から出して冷ます



Elsässer Apfelkuchen

アルザス地方の
アプフェル クーヘン